
旅人・双馬

しーれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人・双馬

【Zコード】

N2428M

【作者名】

しーれん

【あらすじ】

死都ミュロンドへ向かうラムザ一向、
アジョラを倒し、アルマの救出に成功する。
しかし、脱出に失敗した転生者である双馬、
その先に待ち受けるものとは…。
(注意) この作品は作者の自己満足で執筆されています。 そう
いった物が苦手な方は戻るボタンでお戻りください。

プロローグ（前書き）

初めましてしーれんです。

初作品になりますが、完全な自己満足の小説です。

転生・チート・オリジナル主人公が含まれているため、

苦手な方は戻るボタンでお戻りください。

プロローグ

Side・ラムザ

此處は飛空挺の上か？

出入口である魔方陣の上から周りを見渡し、
アジヨラの側に倒れているアルマを見つけ叫ぶ。

「アジヨラ！ アルマを返して貰う！」

僕がそう告げると、アジヨラは「ひらひら」と振り向き殺氣を放つ。

「来た力、愚かなる者共ヨ。

我的復活を妨げるつもりであろうがそつはさせヌー！
出でヨ、我がシモベドモヨ！」

アジヨラの呼びかけと共に、

アルケオテーモンが召喚され、僕達に大挙して押し寄せる。

「ラムザ、俺がアジヨラに一撃を見舞う。
その隙にアルマを助ける。いいな？」

僕が頷くと、双馬は次々と幻獣を召喚する。

『夜闇の翼の竜よ、怒れしば我と共に
胸中に眠る星の火を！ バハムート！』

『漆黒の光閃き、大気の震えとなれ

斬鉄剣！ オーディン！』

「バハムート、オーディン。頼むぞ」

「「御意！」」

双馬の言葉にバハムートとオーディンが応える。

バハムートがメガフレアを放射し、その後をオーディンが駆け抜けた。

メガフレアによりアルケオーディモンが吹き飛ばされ、辛うじて耐える者はオーディンが斬鉄剣で斬り捨てていく。

「斬・鉄・剣！」

オーディンがアジョラに一撃必殺を見舞う。

『ギインー』

鈍い音と共に斬鉄剣を防ぐが、強力な一撃によりアジョラの体勢が崩れる。

「乱れ…斬り…！」

双馬は立て直す猶予を与えず、鬼神の如き速さで斬りかかった。アジョラは右腕が斬り落とされ、小さく呻く。

オーディンがその隙を見逃さず、さらに斬撃を加えていく。

「ぐうう！ 幻獣如きガ、舐めるナ！」

『渦なす生命の色、七つの扉開き

力の塔の天に到らん！ アルテマ！』

巨大な魔力の塊が爆発を起こす。

オーディンは衝撃に耐え切れず、飛空挺の端まで吹き飛ぶ。

アジョラは右肩を押さえ、呻きながら双馬を睨む。

「ハア…、ハア…、

そうカ…、貴様達はかつて我を倒した者の末裔力！

負けヌ！ 我は負けヌ！ 貴様達を滅ぼシ、我が復活の糧にして
くれル！」

その隙に僕はアルマを抱え、出口に駆け出す。

それ同時に小さく吐く息が聞こえた…。

「貫け…、月影流瞬・雷！」

Side・Out

Side・双馬

アジョラが右肩を押さえ、俺に殺氣を放つてくれる。
殺氣をものともせず、次の手を考える。

ラムザがアルマを抱え、出口へ向かうのを横目で確認し、刀の切先をアジヨラに構え、小さく息を吐く。

「貫け…、月影流 瞬・雷！」

言葉を発すると同時に、俺の刀がアジヨラの心臓を貫いた。刺さつたままの刀を手放し、次の手の為に距離を取る。

「灰燼と化せ…！」

『赤き五月雨に地を染めろ
火喰い刀！ 塵地螺鈿飾剣！』

終わりの言葉を告げ、刀の力を引き出す。

「ぐおおおおおオオ…！」

塵地螺鈿飾剣ちじじりでんかせんじりょうが砕け散り、紅蓮の炎がアジヨラを包み込む。

「馬鹿…ナ…」

倒されるとは思わず出た言葉、

アジヨラは崩れ落ち、そして燃え尽きた……。

「終わったか…、戻れバハムート、オーディン！」

「「御意」」

傷ついたオーディンと共に、バハムートが俺の中へと戻る。

「双馬、地上へ戻るついで…」

「ああ、シド達が待つていい」

そつ言葉を返すと、飛空挺が崩壊し始める。

急いで駆け出すが…、俺とラムザの間に巨大な岩が降り注ぐ。

「くつ、双馬！」

「ラムザ、先に行け」

「しかし…」

「自分の妹まで巻き込む気が？」

さつさと行くんだ。俺は必ず戻る」

俺はラムザ達の脱出と同時に、

出口が岩により塞がれるのを見届け、その場に座り込む。

「幾度いくたびの転生を重ねよづとも、物語の終焉しゆうえんに死ぬるは己おのが運命…。是非に及ばず…、か」

『慈悲に満ちた大地よ、つなぎとめる手を緩めたまえ…』レビート

浮遊魔法を唱える。

足場が崩れ、徐々に落下を始める。

「さて、出口は何処か…」

辞世の句を詠むが、死ぬつもりなびさりわら無い。

地上へと繋がる出口が無いか探しながら落として行く。

Side·Out

緩やかに落下して行く……、何処までも深く……深く……。

何処まで落ちただろうか？

そう考えていた矢先に、それは突如発生した。
鏡のようなモノが双馬の真下に広がり、中から多量の手がの伸びて
くる。

「避けられんな……」

咳きながら鏡を睨みつけるが、成す術も無く双馬は引きずり込まれ
た……。

プロローグ（後書き）

プロローグですが、読んでいただきありがとうございます。

一話目 契約（前書き）

タバサメインになりますゆえ、ルイズ・オ人の描写が少なくなっています。

ご了承の上、お読み頂けると助かります。

一話目 契約

Side : タバサ

『我が名はタバサ。五つの力を司るペントAGON。
我的運命さために従いし、使い魔を召還せよ』

サモン・サーヴァントを唱え終わると、召喚のゲートが開かれる。ゲートから風竜が現れ、周りから歓声が聞こえる。

『我が名はタバサ。五つの力を司るペントAGON。
この者に祝福を与え、我的使い魔となせ』

私は風竜に近づきコントラクト・サーヴァントを唱え、口付けをする。

そして、ルーンが刻まれると同時に、ゲートから爆発が起きた……。

「え？」

突然の事に驚き、咄嗟に杖をゲートが在った場所へ向けて構える。煙が晴れるとゲートは消え、変わりに男が立っていた……。

見たことない服を着ている……、腰に差しているのは鞘？ 肝心の剣は？

私は興味を惹かれ、男に近づいて行つた。

Side : Out

鏡に吸い込まれ、気が付けば学校のような場所に俺は立っていた。

「ここはどこだ？ イヴァリースにこんな場所はなかつた筈だ。周りを見渡せば黒いローブを纏つた少年・少女達が、俺のほうを向いている。

一人だけ年齢が突出した男がいるが……、あれは教師か……？

「何者？」

青い髪の少女が杖を構えたまま、俺に話しかけてきた。

少女はそれなりに場数を踏んでいるのだろう、構えに隙がない。

「人に名を「タバサ」前に……、ふう。

俺の名は月影(つきかげ) 双馬(そくま)、傭兵だ。 これで満足か？」

半ば呆れながら自分の名前を名乗る。

しかし、タバサと名乗る少女は俺に対して杖を構えたまま、殺気を放つてている。

「何時まで杖を構えてるつもりだ？

戦いがお望みなら……、受け立とう

言い終わると同時にタバサを睨みつけ、殺気を放つ。

「ツ！」

「ミス・タバサ！ その男から離れなさい！」

先ほどの教師と思われる男が杖を構え、俺に向かって走つてくる。肝心のタバサは足が震えて動けないのか、その場に座り込んでもつた。

俺は殺氣を放つのをやめ、教師のほうに振り返る。

「タバサ！」

赤毛の少女が座り込んだタバサに駆け寄る。友人か？
しかし今の俺には関係ない、それよりも…、

「聞きたいことがある。先も名乗つたが、俺の名は月影つきかげ双馬そうま、
ソウマと呼んでくれ。

それよりここは何処だ？」

「え？ あああ、私の名前はゴルベール。

「ゴルベールの魔法学院で教師をしています」

「トリステイン？ イヴァリースにそんな地名はなかつたと思うが

…

「トリステインを知らない！？ それにイヴァリース…、ですか…？」

「ミスター・ソウマ、貴方は何処からきたのですか？」

敵意がないと判断したのか、警戒を解き俺に質問してくるゴルベール。

イヴァリースでないとすれば、やはり異世界か…面倒だな…。

「イヴァリースという世界から来た。
いや、来たというより、連れて来られたという表現の方が正しい
な。

突然現れた鏡に吸い込まれてね……

「鏡…？ ああ、それはサモン・サーヴァントによって出現したゲートですな…。

つまり、貴方はミス タバサに使い魔として召喚されたのです！」

「使い魔として召喚…？ 召喚が存在するなら帰す方法はあるのか？」

「いえ、召喚する魔法はありますが、残念ながら帰す魔法は存在しないのです。

始祖ブリミルが現れてから六千年経ちますが、使い魔を帰す魔法が存在した、という情報はありません

ため息しか出ないな…。帰れないとなると、デジヨンで次元の狭間に行くか…？

しかし、出口が見つかるとは限らない、最後の手段だな…。

俺はタバサのほうへ振り返る。

「タバサ、君の使い魔にならう

「えつ？」

驚きの声を上げる赤毛の少女、それに同意するかのようにタバサは応える。

「…何を考へてる？」

「場所は異世界、地理も知らない、衣食住の保障もない、その上帰れない。

しかし、使い魔になれば衣食住は保障される。君なりビツタル
?」

タバサは無言でうつむく。選択肢なぞ最初から一つしかない、
わかりきっていた事だ。

俺はうつむくタバサに対しても言葉を続ける。

「ただ、元居た場所に戻るのを諦めてはいけない。
戻る手段が見つかればすぐに帰らせてもらつ

「わかつた……、契約する……。」函んで

「ああ

タバサは俺に近寄ると、なこやら魔法を詠唱する。

『我が名はタバサ。五つの力を司るペントagon。』
この者に祝福を!『え、我の使い魔となせ』

詠唱が終わると同時に、俺にキスをした。

突然両手から痛みが走る、が耐えられないほどもない。

「さて、どこかゆつくり話せる場所に移動しよう

痛みは治まつてないが、移動を提案する。

奇異の田で見られ続けるような場所に長居をしたくない。

「うひー……」

俺はタバサの後を追い、歩きながらキュルケという赤毛の少女と

自己紹介をした。

途中、後ろから爆発音が聞こえたのは気のせいだろ？…。

Side・Out

Side・ルイズ

何度も失敗を重ね、ついに召喚に成功したと思つた…

「あんた誰よ？」

先ほどタバサが召喚した男と違い、なんとも頼り無せそうな少年がそこに居た。

「ミスター・ゴルベール！ もう一度やらせてください！」

「残念だがそれは認められない。 ミス・ヴァリエール、儀式は神聖なものだ。

ミス・タバサと同じように契約しなさい」

私はため息をつく。 前例があるのだし、やり直しは無理ね…。

「あんた、感謝しなさいよ？ 貴族にこんなことされるなんて、めつたに無いんだから！」

「コントラクト・サーヴァントを唱えながら、少年に近づく。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

五つの力を『回るペントagon』。この者に祝福を『え、我の使い魔となせ』

契約が終わると同時に、少年が叫び声をあげて転げまわる。

「いつてええええええ！ 何だよこれー！」

「使い魔のローンが刻まれてるだけよ、すぐ『治まるわ』

多少治まつたのか、サイトは手を押さえながら立ち上がる。

「はあはあ、死ぬかと思った…」

「ふむ、珍しいローンだな…、メモを取りませひひひよ…」

「え？ ああ」

「よし、今日はこれで終了だ、皆は部屋に戻りなさい」

コルベールが終わりを告げると、生徒達はレジテーションを唱え飛び始める。

「空…飛んでる…？」

「ほけつとしてないで行くわよー」

少年はルイズに引っ張られるよつとして、彼女の部屋に連れて行かれた…。

一話目 契約（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございます。

下手な文章が続きますが、少しずつ直していくので、
生ぬるい目で見守つて頂けたらと思います。

1 四畳 講義（前書き）

だいぶ、端折つたりしていますが、最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

Side・双馬

タバサの部屋に着き、俺は召喚されるまでの経緯を説明した。しかし、異世界から来たと言つても信じられないのだろう、一人とも唸つている。

「まあ、異世界から来た事を覚えておいてくれ、別に信じる必要は無い。

それで、使い魔は何をすればいいんだ？」

「…実力が見たい」

「そうねえ、双馬つてメイジなの？」

「明日でいいか？ 疲れているんでね、休ませてもらいたい。
それと、俺はメイジじゃない」

「わかった…、ここでのベッド使って」

「ありがたく使わせてもらおう」

俺は刀の無くなつた鞘をはずし、ベッドに入る。

「夕食は…？」

「ちよ、ちよっと、もう寝るの？」

二人の声を聞き終わる前に、俺は眠った。

翌日

田を覚ますと、横でタバサが眠っていた。

俺はタバサを起こさないよう部屋を出て、外へと向かった。

「うわっ」

「すまん、大丈夫か？」

外に出る途中、少年と出会い頭にぶつかった。

助け起こそうと少年の手を取ると、手に使い魔のルーンが刻まれているのが見えた。

「お前も使い魔なのか？」

「お前もって事は、あんたもなのか？」

「ああ、タバサの使い魔をすることになった。
俺の名は田影 双馬。 ソウマでいい」

「ソウマ？ 俺の名前は平賀 オ人。 サイトって呼んでくれ。
といひでソウマは…日本人か？」

「いや、俺はイヴァリースから来たんだ」

「そつか…」

「まあ、同じ使い魔として、今後とも宜しくな

「ああ、よひしへ。 いけねつ、そろそろ戻らな」と。

サイトと別れ、広場に出ると『ライブリ』をルーンに向けて唱える。

「魔手のルーン、効果は両利きになる…か、特に書は無からうだな。
さて、散策しながら戻るか…」

部屋に戻ると、タバサは既に起きていた。

「どこ行つてたの？」

「早くに目が覚めたから、少し散策に行つていた

「そり…、朝食に行く

食堂に着くと、誰かと言ひ争ひ中のサイトを見つけた。
しばしばみるとサイトは呆れた顔をしながら、両手に何かを持って外へ出て行った。

「うう」

タバサに引っ張られ、連れて行かるとキュルケが既に食事をしていた。

「おはよう

「あい、おはようタバサ、ソウマ

「おはよう、キュルケ

キュルケと挨拶を交わし、タバサの座る椅子を引く。

タバサは少し驚いたが礼を言ひて椅子に座ると、俺に座らせて促してきた。

「適当に食べて

「うおひうおひうおひ

食事が終わり、授業を受けるために教室へ向かう途中、一人が尋ねてきた。

「ソウマ貴族なの（かじら）？」

「いや、平民だが？ まあ、貴族の知り合いが居たからな…。食事作法や、礼儀にはつるむなくて覚えてしまったんだ」

教室に到着し、席に着くと中年女性が入ってきた。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。私はこうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

中年女性が笑顔で使い魔達を見渡す。

「変わった使い魔たちを召喚したものですね。ミス・ヴァリエール、それにミス・タバサ」

「お初にお目にかかります、私の名は月影 双馬。以後、お見知りおきをミセス」

「あらあら、礼儀正しい使い魔ですね。

私の名前はシュブルーズ、二つ名は赤土です」

俺がシュブルーズと紹介を済ませ、席に座ると講義が始まった。火・水・土・風、四系統の内容を説明をタバサは横で本を読んでいたが、俺は集中して聞いていた。

中でも興味を惹いたのが伝説として語られる虚無について、詳しいことはわかつていない。

しかし、帰る為の可能性があるとすれば虚無か？ そう考えていると…、

「では、ミス・ヴァリエール。 貴方に鍊金をして貰いましょう」

シュブルーズがそう言つと、皆が「え！？」と驚いた顔する。

「ルイズ！ お願い、やめて！」

キュルケがルイズに向かつて叫ぶが、ルイズは教壇に歩いていつた。

すると、周りの生徒達が机の下に隠れ始める。 キュルケやタバサも例外ではなかつた。

「隠れて」

タバサに引つ張られるように机の下に隠れる。

「何が起きるんだ？」

尋ねると同時に、爆発音が響き渡つた。

見れば突然の爆発に驚いた使い魔達が暴れ回つていた。

「なるほどな…」

その後、片づけを命じられたルイズとサイトを残し、タバサと共に食堂へ向かつた。

タバサとキュルケと俺の三人でテーブルを囲み、先ほどの爆発や虚無について話していた。

「魔法は失敗すると爆発するものなんだな…」

「しない」

「そうね、魔法に失敗すると魔力が霧散して何も起きないわ」

「爆発は失敗じゃない…？ 誰にも知られていない虚無、原因のわ

からない爆発…。

つまりルイズは虚無の可能性あり…と

「「ツ…?」」

「可能性があるだけで、確実にとは言えないがな…」

「ソウマ、貴方本当に平民なの?」

「鋭い…」

そんな会話を続けていると、後方から大きな声が聞こえた。

Side·Out

稚拙な文章が続きますが、最後まで読んで頂きありがとうございました。
す。

二話題 決闘（前書き）

求む『文才』な状況ですが、お付き合いください。

Side・双馬

「決闘だ！」

その声を聞いた俺は、声の元に向かう。
そこにはサイトとギーシュと呼ばれる金髪の少年がいた。

「サイト、どうしたんだ？」

「ソウマか？　聞いてくれよ、」「いつが一股かけてた事がばれて振
られたんだ。

それをシエスタに八つ当たりしてたんだよ。　それを止めたら決
闘申し込まれた」

「クククツ、人として最低だな？」

サイトから原因を聞き、俺は笑う。

「ソウマと言つたな？　あ、君は平民のくせに、貴族を意見するの
かね！？」

「ふう、今の話に貴族と平民の言葉は必要なのかね？」

「当たり前だ！　平民は貴族に対して絶対服従なんだ！
平民が貴族に意見を言つてはいけないんだ！　そうだろ皆！？」

周りの連中が「そうだ！　そうだ！」と同調する。

どこの世界でも貴族は同じだな……、まともなのはいつも一握りか……。

「ふん、家名も言えぬやつの使い魔風情が、貴族に意見するんじゃない！」

「似非貴族が何を言つてゐる？」

「き、貴様！ 決闘だ！」

ギーシュの隣いた少年が俺に向かつて吠える。
結局、俺とサイトは決闘することになり、広場へと向かうことになった。

「タバサ、すまんな」

「別にいい、貴方の実力も見れる」

「彼の名はヴィリエ・ド・ローヌ。 以前、私とタバサにちょっとかい出してきたのよ。 後でタバサとは決闘をしてボロ負けしてたけどね、フフフ」

そう言って笑うキュルケ。 タバサはこちらをじっと見つめていた。

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュがそう言つと歓声が広がつた。
広場をぐるりと囲む生徒達、娛樂にでも飢えてゐるのか、単に暇
なのか…。
やう思ひのほど生徒が集まつていた。

「サイト、これを見してやる」

俺はサイトの所へ行き、袋から取り出した正宗を渡す。
約七十㌢ほどの刀身、サイトには一度良い長さだらう。

「え、日本刀？」

「名は正宗。お前に一度いい長さのはずだ」

「あ、ありがとうございます。後で返すな」

「ああ、がんばれよ？」

俺はやう言つてサイトから離れる。

正宗を持ったサイトは一瞬、顔をしかめるがすぐとも表情こ
戻つた。

「逃げずに来たことは褒めてやう。ついでに
決着は僕の杖を奪うが、降参すれば終わつてしまつ

「へーへー、慈悲深い」と

「口の減らない平民だ。言つておくが、僕はメイジだ。魔法を使わせてもらつが、卑怯とは言つまうね？」

「別にいいや、俺も武器を使つしな」

そう言つて鞄から正宗を抜き構えるサイト。

ギーシュは薔薇を振り、女性型のゴーレムが一体現れる。

「僕の一いつ姫は『青銅』、このワルキユーレが君の相手をしよう！」

言い終わると同時に、ワルキユーレがサイトへ走り出す。

「破つ！」

サイトも合わせて走り出し、ワルキユーレに對し一閃……。

「なつー？」

ギーシュだけでなく、周囲も驚いていた。

なにせワルキユーレが真つ一つになつっていたのだ。

俺も少なからず驚く、一瞬ではあるが人を超えた動きをしたのだ。

「へ、平民にしてはそこそこやるようだね？ だが、これなりどうかな？」

そう言つて薔薇を振り、さらに六体のワルキユーレを鍊金する。先ほどとは違ひ、三体が槍を残りの三体が剣を持っていた。だが、サイトは焦るどころか余裕の表情をしていた。

「今なら負ける気がしねえ、幾らでもかかつて来いよ！」

挑発するサイト、ギーシュは顔を真っ赤していた。

「舐めるな！」

剣を持ったワルキューレ三体がサイトに襲い掛かる。

しかし、三位一体の攻撃をあっさりと避け、サイトは刀を振るつ。袈裟懸け・逆袈裟・一文字に三体を切り伏せ、ギーシュに駆け寄る。

戦術に問題ありだな……、剣に対しては槍だろ……。 そう考えていると……、

「ま、参った……」

刀を突きつけられたギーシュが降参し、勝負は決着していた。そしてサイトは刀を鞘に納めると、その場で崩れるように倒れた。

「サイト（さん）！」

サイトに駆け寄るルイズとショスター、そして追いついて俺はサイトに近づく。

「氣絶しているだけだ、怪我もないし大丈夫だ。
それより医務室へ連れて行つてやつてくれ」

怪我らしい怪我は無い、人間には出来ない動きをした反動と判断し、ルイズ達に医務室へ運ぶよう促す。

「い、今まで待たせるつもりだ！ 平民！

だが、謝るなら決闘は無にしてやってもいいんだぞ？」

背中から、ヴィリエの声が聞こえる。俺が振り向くと、ヴィリエは少し足が震えていた。

先ほどの戦いでギーシュが負けたのが原因か、唯の平民ではないことが原因かはわからないが…。

「待たせたか？ それに生憎だが、俺は馬鹿に謝る予定はない」

「き、貴様！ 言わせておけば…」

『ラナ・デル・ワインデ エア・ハンマー！』

空気の流れを読み、難なく避ける。

驚愕するヴィリエだが、続けざまに魔法を唱える。

『デル・ワインデ エア・カッター！』

先ほどと同じように避けるが、同時に鞘を放り投げる。

すると《スペツ》といい音を出しながら鞘が一いつ斬られた。

「不可視な上に、ずいぶんと殺傷能力が高いな…。
もしサイトが対峙してたら死んでいたかもな」

そんなことを呟く俺に、ヴィリエが言つ。

「どうした、平民？ 避けてばかりじゃ勝てないぞ？」

「そうだな、そろそろ攻めるとじよつ。
だが、その前に一つだけ言つておく……。俺はサイトほど甘くはないぞ？」

『デル・ワインデ エア・カッター！』

俺はゆっくりと歩きながら風の刃エア・カッターを避け、近づいていく。ヴィリエは魔法が当たらないことに焦り、風の刃を打ちまくるが全て紙一重で避けられる。

『フ、フライ！』

空に逃げようとするヴィリエの足を掴み、そのまま地面に叩きつける。

「ま、参つ…、ゴフッ！」

降参の言葉を言つ前に、鳩尾に蹴りを入れる。

のた打ち回るヴィリエを見ながら、俺は笑顔を浮かべながら言つ。

「言つたはすだ、俺はサイトほど甘くないと。
本来、決闘は生命を賭けて戦つもの、死んでも文句は言えない…」

「ヒツ、た、助けて」

「…そこまで」

タバサが俺とヴィリエの間に入り、決闘の終わりを告げた。

「無事…、でしたね。オスマン殿？」

「やうじやの…、にしてもあやつ何者じや？
コルベール君、お主は『ティテクト・マジック』で確認をしたん
じやう…」

「ええ、一瞬ですが大量の目が見えました」

一瞬？　おまけに大量の目？　まったく、どうなつとるんじや…。
あの男は眠りの鐘も効かぬし、遠見の鏡で見ていた事も気付いて
る様子じやつた…。

「オスマン殿、やはり王面に報告すべきでは…？」

「はあ、お主は戦争を起こしたいのかの？　伝説のガンダールヴに、
メイジより強い平民…」

唯でさえガンダールヴは一騎当千なんじや、王面がそのことを知
れば戦争に使うのは目に見えているじやろ？　ともかく、この件は
わしが預かる。　良いな？」

「は、はい。　いつもながらオスマン殿の深謀には恐れ入ります。
では、私は後始末のまづをしてきます」

「コルベールが退室するのを確認し、ため息をつく。

「双馬か…、まさかのう？」

二) 話題 決闘(後書き)

誤字・脱字などありましたら、J報告頂けると助かります。

四話目 実力

Side：双馬

決闘後の夜

タバサに実力を見せるため、俺は再度決闘を行つた広場へと來ていた。

どうやら、昼間の決闘だけではお氣に召さなかつたらしい。

俺は袋から虎鉄と備前長船を取り出して腰に差し、準備をしてタバサの方を向く。

「…準備は？」

「いつでも」

「私が合図するわ。

火が消えたら開始よ、『ファイヤー・ウォール！』」

俺とタバサの間に火が立ち上り、炎の壁が出来あがる。

炎を間に挟みながらお互いに睨み合つ…、そして火が消えると同時にタバサが動く。

『デル・ワインデ エア・カッター！』

ヴィリエと同じ不可視の刃が放たれるが、速度・大きさがまるで違う。

俺は手刀でかまいたちを放ち、相殺すると同時にタバサと距離を詰め、回し蹴りを放つ。

「くつ！ 早いつ！」

『ラナ・デル・ワイン』『エア・ハンマー！』

タバサは寸前で後ろに飛び、同時に風の槌を放ち反撃した。

俺は風の槌を見据え、腰を落とし拳に氣を込めて構える。

「ふつ！」

小さく息を吐き、正拳突きで風の槌を打ち碎く。
そして、そよ風が後ろに抜けていった。

「こ」の程度か？

「嘘でしょ……？」

俺は挑発し、観戦していたキュルケは驚きの声をあげる。
そして、キュルケはあり得ないといった顔で俺の方を見ていた。

「…まだまだ」

『ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ワイン』

「そう来なくては」

詠唱が終わるとタバサの周りに無数の氷柱が浮かんでいた。

それを見て俺はにやりと笑い、全身の力を抜き構える。

「…」じれで終わり

『ウインディ・アイシクル!』

タバサが終わりの言葉を告げると、全ての氷柱が俺日掛けて降り注ぐ。

避けるそぶりの無い俺に、キュルケはあせつたようだが…、

『力チン』

鞘に刀を収める音が聞こえると、全ての氷柱が砕け散った。

『月影流 居合い抜き』

今度はタバサも驚いた顔をして見ていた。
これ以上の魔法はもう無いのだろう、俺はそう判断して言い放つ。

「今度はこちから行くぞ？ 避けてみろ」

『死ぬも生きるも剣持つ定め…、
地獄で悟れ！ 暗の剣!』

刀を振ると同時に、足元から三日月型の剣が突き出る。
タバサは地面からの攻撃に気付くのが遅れ、避けられずに直撃する。

「あつ…」

「タバサ！」

タバサが小さな声を上げると同時に、キュルケが叫ぶ。突き刺さった剣が霧散すると、タバサは杖を落としその場で倒れた。

キュルケがタバサに駆け寄り外傷が無いことを確認していた。その間に俺は袋からエーテルを取り出す。

「良かつた…、ただの魔力切れみたい」

「これを飲ませろ」

そう言つてキュルケにエーテルを渡す。キュルケは「大丈夫なの？」と言つた顔をしていたが、エーテルに魔力が込められている事に気付き、タバサに飲ませる。

「部屋に連れて行く」

「ええ、そのほうが良いわね」

まだ目を覚まさないタバサを抱きかかえながら、部屋へと戻る。キュルケはタバサをベッドに寝かせるのを確認すると、自分の部屋に戻つて行つた。

俺は虎鉄と備前長船を袋に入れ、ベッドに入り込み、そのまま眠つた。

Side...???

城の一室、そこで男が酒を飲みながら一人でチェスをしていた…。

《コンコン》

部屋をノックする音が聞こえ、駒を持っていた手を止める。

「入れ」

「失礼します」

入ってきたのは秘書のような格好をしていた若い女性。

「ジョセフ様、ご報告します。シャルロット様が召喚した人間ですが…。

シャルロット様と戦い、倒したそうです。ですが、メイジでは無いとの事です」

「メイジではないのにシャルロットを倒した? ククク、クハハハハハッ!」

ジョセフと呼ばれた男は報告を聞いて、急に笑い出した。そして何かを思いつき、女性に対して命令を下す。

「ショフイールド! その人間に刺客を送り込め、隙あらば殺して

も構わん！

だが、シャルロットは殺すなといい念めておけ

「はい、すぐに準備いたします。」

ショフィールドと呼ばれた女性は踵を返し、退室する。ジョセフはまだ笑っていた。まるで新しい玩具を買って貰えられた子供のようだ。

Side·Out

四話題 実力（後書き）

短いですが、いいおまでです。

五語目 本音（前書き）

なかなか上手く書けません。
変な部分が多いですが、『容赦ください。

Side・双馬

翌日

「あの剣は何？」

それが俺が目覚めた時に聞いた、第一声だった……。呆れた顔する俺をタバサはじつと見つめていた。

「名を『暗の剣』、対象の魔力を奪い使用者に還元する技だ」

「技？」

「ああ、騎士が神に背を向けることで、暗黒騎士となる。ダークナイフ

その暗黒騎士になつた者が修練を積み、技を編み出した。

それゆえ、対人に特化し、魔力や生命力を奪う……、『闇の技』と成つた」

「『暗の剣』……私にも教えて欲しい」

『闇の技』、そう言つたにも関わらず教えて欲しいか……。闇の力が欲しいのか、それとも単純に力が欲しいのか。見極める必要……は無いな、単純に力が欲しいのだろう。

「そうだな……、条件を呑めれば教えてやる」

「……その条件は？」

「簡単なことだ。タバサ、お前にとつて大切な者を殺せ。それが、暗黒騎士になるための第一歩になる」

「なつー!？」

俺はそれが当たり前、と言つ様な顔をしてタバサに告げると、タバサは驚き声を上げる。

闇の力を得るんだ、その程度は軽くこなして貰わないとな……。剣を極めず、しかも簡単に使えるようじゅ、ガフガリオンが浮かばれないさ。

「……ソウマもそうしたの？」

「さてな

「私には無理……」

「だらうな、お前の目には復讐の炎が宿つていて、小さな光を守るために燃えているように見える。

もとより無理な話だつたんだよ、お前にはな……」

俺の言葉に俯くタバサだが、少し怒つているようだ見える。

「これから知つていてたの？ 知つていたのに条件を提示したの？」

「そうだ」

「ソウマ！ 貴方は！」

殴りかかるうとするタバサの腕を掴む。
よほど頭に血が上っていたのだろう…、魔法を使わずに殴らうとしたのだから。

「家族だろう？ お前が守りたいものは」

タバサの腕を掴んだまま、俺は問い合わせる。

そして、家族という言葉にタバサは一瞬怯えるような目を見せた

「…守りたい、家族を…、母様を…」

「そうか、なら闇の力は余計に止めておけ、アレは人に不幸しか招かない。

使えたとしても、使い続ければ家族を、大切な人を失つていただろう」

「だけど！ 力が…、母様を守るために力が足りないの…」

「タバサ…、個人の力には限界がある…。 なら、タバサと俺の二人の力なら？」

それでも守れなければ、キュルケやシルフィードも合わせた力なら？」

「そ、それは…」

「迷惑と思うな。 キュルケやシルフィードはお前を助けたいと思っている。

「 そうだろう? キュルケ」

俺が扉に向かつてキュルケの名を呼ぶ。 タバサは一瞬意味が分らないといった顔をしたが…。

「何時から気付いてたの?」

問い合わせと共に部屋に入つてくるキュルケがそこに居た。 だが、俺は問い合わせに答えず、黙つてキュルケを見ていた…。

「 そう、 でもソウマ、 貴方の言うとおりよ。

タバサ…、 貴方は何でも一人で背負いたがる。

私は貴方が助けを求めるまで待つつもりだったけど、 もう待たないわ

「え?」

急な展開についていけず、 タバサは相変わらず分らないといった顔をしていた。

そんなタバサをキュルケは笑顔で見ていた。

「 言つただろ? お前は一人じゃないと。 これからは友を仲間を頼れ。

そして、 今日から俺もタバサの仲間の一人だ」

そう言つてタバサの頭に手を乗せる。

すると、 タバサは目に涙を滲ませながら俺を見上げてきた。

「泣きたいときは泣いたらいい、もう我慢する必要は無いんだ」

今にも泣きそうなタバサを抱きしめて、俺は優しく言つ。

そして、溜まっていたものを吐き出すようにタバサは泣き続けた。

泣き疲れ、眠ったタバサをベッドに寝かしながら俺はいつ。

「キュルケ、タバサは今日欠席すると伝えておいてくれないか？
それと、食事についても頼む」

「ええ、分つたわ、後お願いね？」

そう言うとキュルケは部屋を出て行つた。

タバサを眺めながら、俺はラミアの豊穣を取り出す。

「久しぶりに弾いてみるか…」

俺は呟き、豊穣に手をかけ歌を奏で始めた。

Side・Out

Side・キュルケ

私は今、とても気分が良かつた。ソウマのおかげで本当のタバサが見れた気がしたから…。

そして部屋に戻り、フレイムを連れて厨房へと向かう途中、メイドがいたのでタバサの食事を頼む。

「さて、フレイム。私達も食事に行くわよ~」

「えへへ~」

食堂に着くとルイズを見かけない、そういうえば昨日の決闘で使い魔が倒れたんだっけ…。まだ、看病でもしてるのなら、後で見舞いにでも行こうかしらね。

そんな事を考えつつ、私は食事して教室へと向かった。

「それにして、ソウマ…。彼は一体何者かしら~。職業を傭兵なんて言つていたけど…、でも嘘をついているようこたつ見えないし…」

考えても仕方ないわね…、今はタバサとの距離が縮まつたことを喜びましょう。彼が何者か…、それはいずれ分ることは必ずよね。メイジに勝てるほどの傭兵…、もしかして伝説の傭兵とかかしら? フフフ、楽しくなってきたわ。

五話目 本音（後書き）

短いですが、以上になります。

ガフガリオンについてはFFTを検索していただけると分ります。

六話四 母親（前書き）

今回は最後です。

翌日

翌日、朝食を取り終えた三人はシルフィードに乗り、上空約千メートルの場所に来ていた。

「私の本名はシャルロット・エレーヌ・オルレアン…」

「オルレアン！？ タバサ、貴方ガリア王国の王族だったの！？」

タバサの言葉に驚きの声を上げるキュルケ。

「現ガリア国王ジョセフの弟シャルルが私の父様。無能王と呼ばれるジョセフに比べ、父様は若干十一歳の若さで風のトライアングルになり、周囲からの人望も厚かつた。だけど優秀がゆえに、父様は五年前に暗殺された。そして、母様は私を守るために…、毒を…毒を飲んで心を壊されたの」

「そうか…、少し質問していいか？」

ソウマの言葉にタバサは頷く。

「ジョセフが無能王と呼ばれるのは何故だ？」

「ジョセフは王族でありながら、魔法が使えない。それが、無能王たる所以」

「魔法が使えないれば、無能王か…。だが、無能なのは魔法だけで、王としてはかなり優秀のようだ。でなければ、タバサの父は今でも生きていただろう」

「なぜかしら?」

キュルケは分らないといった顔をしてソウマに質問をする。

「ああ、周りから無能王として見られ、弟は優秀で人望も厚い。しかし、弟は人望もない無能と言われる王に暗殺された。それがどういうことか?」

王族を暗殺をする場合は容易ではない、だがそれを成し得たという事は、ジョセフが無能ではないという証明だ。人の力は何も魔法だけじゃない、魔法の才能がない分、別の才能があつたんだろう

タバサは睡然としていた。魔法が使えない、そして無能王、その言葉に騙されて、相手の力を見くびっていたのだ。

「もう一つ質問だ。タバサ、お前の母親は毒を飲んで心が壊れたのか?」

タバサは「クリと頷く。

「直せるかも知れないぞ?」

「「本当?」」「

タバサとキュルケが声を揃えて聞き返す。

「ああ、俺の世界では万能薬と言つ代物でな、どんな毒でも解毒できる効果がある。残りは…、一本しかないな、タバサお前にやろう」

ソウマは万能薬をタバサに向けて放り投げる。タバサは慌ててそれを受け取り、大事にしまう。

「ちょ、ちょっと… どんな毒でもって…、そんな物が貴方の世界にはあるの？」

それに、それって高価な物じゃないの？」

キュルケの言つことはもつともだが、ソウマの居た世界では市販されている薬だ。

「この世界でなら高価な品になりつるが、同じ効果の『エスナ』という魔法もあるため、ソウマにとっては無用の長物だ。」

「…いいの？」

「俺には無用の物だ。だが、それしか無いからな、落として割つたりしない様に気をつけろよ？ この世界ではもう手に入らないんだからな…」

「どんな毒でも解毒できる薬…、売れば一体幾らになるのかしら？」

タバサ達はキュルケが邪な考えをしているのを余所に話を進める。

「ところで…、直した後はどうするんだ？ 治つた事がわかると、また毒を盛られるか、殺される可能性がある、別の場所に隠れたほ

うがいい

「それなら、私の家に着たらいいわ。 ほかならぬタバサの為だも
の」

「二人とも、ありがとう……」

もしタバサ一人であつたら出来なかつた事……、タバサは二人に感謝の言葉を告げる。

そんな様子を見ながらソウマは考えていた。 キュルケの家はギルマニアでも屈指の家柄、いかに王族といえども迂闊に手出しが出来まい……。 だが、できるだけ先手を打つておくべきだらう。

「行動するなら早いほうがいいだらう、一昨日のタバサとの勝負を監視していた者がいるからな……」

「わかつた。 シルフィード、私の家へ」

「きゅーいー！」

シルフィードに指示を出し、一行はタバサの屋敷へと向かつた。屋敷へと到着すると、そこには執事が出迎えていた。

「お帰りなさいませ、シャルロット様。 ところでお嬢様、後ろの方々は？」

「彼らは友達。 今は時間が無いの、すぐに母様の所へ」

「お嬢様！？」

執事の言葉に応えると、タバサはわき田も振りりすた屋敷の中へと入つて行つた。

「キュルケ、一緒に行つてやれ

「わかつたわ、後お願いね。 まつて、タバサ～

キュルケにタバサの後を追うように促がすと、それに同意して走つて行く。

「シャルロット様が屋敷に友達を連れてくる日が来るとは…、感激でござります」

「よほど嬉しかつたのだろう、ハンカチで口を抑えながら「感激です」と呟くばかり。

「執事殿、少しそひしいか？ 私の名は月影 ソウマ、職業は傭兵だが、今はタバサ…、いやシャルロットの使い魔をやつている

「なんと… 人間の使い魔とはまた珍しい…。 つと、申し訳ありません、失礼を致しました。

私の名前はペルスランと申します。 シャルロット様に執事として仕えさせて頂いています」

何時までもそのままにしておけず、自己紹介を互いに済ませ、ソウマは今までの経緯を説明することにした。

オルレアン公夫人を治す薬を持ってきたこと、治つた後はキュルケの実家に匿つて貰う事…。

「…というわけだ」

「せうでじしたか…、シャルロット様に代わって改めてお礼申し上げます」

感謝の言葉と共に、深く頭を下げるペルスラン。

そして、頭を上げたペルスランの顔には笑顔が浮かんでいた。

先ほど、タバサが友達を連れてきたと言った時以上に、嬉しそうに

…。

Side・ソウマ

「いや、かまわ…」

構わない…、そつ言い終わる前に、殺氣を放っている者の気配に気付く。

そして、俺は気配の方へと向き直り、ペルスランに告げる。

「じつやひ、お嬢様のようだ」

「お嬢様ですか…？」

ビービーのだらう?と言つた顔をするペルスランを余所に、俺は気配のある方に声をかける。

「アーニーなんだらう?出てきたらうだ?」

「よく、気付いたな……」

俺に言われ、男が木の陰から現れる、その手にはナイフを携えて。

「それだけ殺氣を放つていれば気付く」

俺がそう言い放つと、男は笑いながら「こちらに歩いてきた。

「けけけ、楽しめそうだな……」

「ペルスラン殿、下がつてくれ

「しかし……、シャルロット様の友達に「下がれ」……、分りました」

俺は殺氣を解放すると共に、ペルスランの言葉を遮る。ペルスランは渋々承知すると、屋敷のほうへと下がつていった。

「こちらの名前は知っているのだ」「貴様の名を教えてもらおうか」

「地下水……」

名を告げると、地下水が俺の懷へと飛び込み、ナイフを横に一閃する。

俺は身を縮めて躲すと同時に、掌底を叩き込み相手を吹き飛ばす。

「ぐつ！ 人間の癖になんてえ力だ」

吹き飛ばされ倒れた地下水だが、すぐに起き上がる。

しかし、胸へのダメージが大きかったのか、地下水は胸を押さえ

ながら呻く。

「ちつ……」

『エア・ハンマー!』

気を込めた拳で、風の槌を打ち碎く。
その光景を見た地下水は呆れた顔をしてた。

「てめえは本当に化け物だな……。 魔法を素手で打ち碎くなんて人
間に出来るわけがねえ」

「褒め言葉として受け取つておひづ」

言い終わると同時に、その場から俺の姿が消えていた。 一瞬のこと
に地下水は驚きまわりを見渡すが、俺は既に地下水の後ろに立
つていた。 そして、そのまま回し蹴りを叩き込む。

「ちい！」

ガードされるが、それでも受けきれずに転がりながら吹き飛ぶ。

「いい反応だ」

「はあはあ、ありがとよ……」

『ウインディ・アイシクル!』

地下水の詠唱が終わると、俺に向かつて無数の氷柱が襲い掛かる。
数、威力はタバサより上だったが、俺は全てを避けきつて悠然と

立っていた。

「弱いな…」

「てめえが強すぎるだけだ！ 化けモン！ だがな、これで終わりだ！」

『アイス・ストーム…』

突如、竜巻が立ち上り、中には光る粒が見える。光って見えるのは氷の粒か？ おまけに先ほどの氷柱を巻き込みながらこちらに向かってくる。

だが、避けられないほどでもない、そつ考えてチラリと背後を見る…。

「避けたければ避けな！ 後ろの屋敷がどうなつても良いならなー！」

「三下のセリフだな。だが、その企み…打ち砕いてやるつ

『行方知らぬ風達よ、我が声に集え…。天空への門を開かん、トルネド…』

俺は『トルネド』を唱え、竜巻を発生させて相殺するが、その余波で氷柱や氷の粒が周囲を飛び交う。そして、それが治まると地下水は倒れていた…、どうやら心臓を氷柱に貫かれたようだ…。

「まだ生きているか？」

「な…、ナイフを…」

その言葉と共に地下水は絶命する。俺は近くに落ちていたナイフを拾い上げる。

魔力を感じるため、マジックアイテムと判断するが別段珍しいとこ^うは見当たらない。

その瞬間、体中を何かが駆け巡る。しかし、すぐにそれは消えてしまった。

「な、何故でめえは俺の支配を受けつけねえ！？」
それに…、ぎええええ！ な、何か居やがる！」

「ふむ、ナイフが喋るとは珍しいな…。 それに本体はお前か、地下水よ」

「ちっ、そつだ…、俺が地下水だ。 どうする？ 俺を壊すか？」

「壊すかどうかは話を聞いてからだな」

「何が聞きたい？」

地下水から聞き出した情報を整理する。地下水は持つ人間を支配でき、支配した人間の魔力が自身の魔力を使うことで、魔法を使えることができる。そのため、魔力を持った人間の場合はより強力な魔法を行使できるとか…。

そして、肝心な雇い主…、女ということしか分らないとのこと、殺せば一万エキュー貰えると聞いてホイホイ乗つたらしい。

「…なるほどな。 地下水、お前は俺に従う気があるか？」

「な、なんでてめえ見たいな化けモンに…、壊すなら壊しやがれ！」

「壊したところでお前は死ないだろ？ 刃を折ったとしても再生きる…、違うか？」

「ばれて…、じゃあどうするってんだ？」

「俺には『シャナク』という魔法があつてな…、それはどんな呪いで解くことができる。お前に使えばどうなるかな…？」

「し、従います！ い、いや、従わせて頂きます！」

じつして、俺は地下水を手に入れた。
地下水を使えばこいつらの世界の魔法を使える…、田へいらまじに使えるな。

さて、タバサ達のところへ向かつか…。

Side·Out

Side·Out

「ああ、シャルロット…、こんなに大きくなつて…」

母様にソウマから貰つた万能薬を飲ませると、私の方を向きながらシャルロットと黙つてくれた。

「母様！」

「『めんなさいね、貴方には辛い重いばかりさせた…』

抱きつづく私に、母様は昔のよつに顎を撫でてくれる。

「大丈夫、今は友達や、仲間がいるから」

「お初にお目にかかります。私の名はキュルケ・フォン・ツェルプスターと申します。タバサと同じ魔法学院の生徒で、タバサの友達です」

「私は亡きオルレン公シャルルの妻、そしてシャルロットの母です。キュルケさん、シャルロットと仲良くなして貰いたいね？」

「もちろんですわ」

「母様、そろそろ屋敷を出る支度を…、詳しい話は後で」

まだ満足に動けない母様の横で、キュルケと一緒に持つて行くもの厳選していく。

しばらくすると部屋の扉からノックが聞こえてくる。

「シャルロット、キュルケ、支度は済んだか？」

「大丈夫」

支度を済ませた私達は、母様と荷物に『レビューション』をかけて外へと出る。

「早く」レを出たほうがいい、先ほど地下水に襲われたばかりだからな…。

襲われたとき近くに気配は無かつたが、危険であることは変わりないだろう、「うう

外へ出る途中、ソウマが事も無げに言つてきた。

だが、その言葉に私は驚いた。地下水といえば、年齢も性別も不明という謎の傭兵メイジ…、誰にも気づかれずに現れ、目的を果たすと消えてしまうその手腕から地下水と呼ばれている…、そんなのを相手にしてたなんて気付かなかつた…。

「地下水は？」

「ああ、」レにいる

ソウマがナイフを取り出す。するとナイフが喋りだした。

「おう、宣しくな嬢ちゃん」

「インテリジョンスナイフ？」

「ああ、だが今は俺の支配下にある、問題はない」

「…わかつた」

私は母様と荷物、ペルスランを含む使用人を全員をシルフィードに乗せる。

「シルフィード、少し重いけどお願ひ」

「きゅーいっ！」

そして、皆をシルフィードに乗せてキュルケの実家へと急いだ。
向かう途中、母様と話す使用人たちが涙を流しながら喜んでいた
。：

Side·Out

六話四回 訓練（前書き）

前回同様長めになつております。

決闘から三日目、ソウマは一足先にキュルケの実家から学院へと戻っていた。

そして、広場で田を覚ましたサイトとソウマは会っていた。

「ソウマ、ありがとな」

「何、俺から貸したんだ。気にする事はない」

サイトは礼を言しながら、決闘の際に借りていた刀をソウマに返す。

「それにしても、その刀はすごいな！ なにせ、持つだけで強く慣れるんだし！」

刀を褒めるサイトだが、自身の持つ力に気付いていなかった。逆に気付いていたソウマは苦笑しながら、サイトに言葉を返す。

「いや、持つだけで強くなれないぞ？ 単に切れ味がいいだけだ…。」

つまり、ワルキューを斬ったのはお前の力だよ、サイト

「や、そつなのか？ 俺でつくり…」

ソウマの言葉を信じきれず、サイトは少し疑つみつ眼差しを向

ける。

今まで普通の学生をしていた人間が、刀を持つだけで戦えるようになる…。

そんな状況になれば、刀に何か力があると勘違いするのも無理はない。

「そうだな…、確認がてらに少し手合わせするか。

最初は素手で、その後に木刀を持った時の力の違いを見れば十分だろう」

「え、良いのか？」

ソウマの提案にサイトは困惑するが、自身の実力も知りたかっため、ソウマに向かって構えを取る。

「遠慮はいらん、来い」

その言葉が開始の合図となり、ソウマに向かってサイトは地を蹴つて突進してくる。

「ていつ！」

「遅い」

サイトの突きをあつさりと止め、そのまま自由に攻撃させる。だが、腰の入っていない突き、重心の定まっていない蹴りを受け流しながら考える。

全ての攻撃が軽い…、それ以上に体力がない。既に息を乱しているサイトを見る。

「はあっ！」

「もういい、わかった…」

ソウマは全ての攻撃を受けきると、少し頭を抱えていた。
本当に決闘に勝ったサイトなのか？ 実は別の人物と入れ替わったのではないかと思うほどであった。

「…はあ、はあ、全然当たらなかつた」

そう言つと、サイトはその場に座り込み、息を整えようとする。
横目でソウマを見るが、自身の攻撃を全て防いだソウマは平然と立っていた。

「少し休憩したら、次は木刀を持つてみる。 それで何か変化があつたら教えてくれ」

そして、サイトが落ち着いたのを見てソウマは木刀を渡す。

「おっ、体が軽くなつた」

「サイト、左手のルーンが光つてゐるぞ？ どうやら武器を持つと能力を発揮するタイプのようだな。」

その状態でかかつて来い、手加減なしの全力でな」

決闘のときのように体が軽い…、ソウマの言つていた通りルーンの力らしい。

さつきはソウマに攻撃が当たらなかつたけど、今な…」

「はっ！」

「速い…、先ほどとは大違ひだな」

素手の時と違い、普通の人間には出せない速度で動いている。が、速いだけで型も何もあつたもんじやない、これでは訓練した人間には通じないだろ…。

「やつ！」

サイトの繰り出す袈裟切り、逆袈裟、をソウマは全て受け流す。武器の使い方もわかるのか？ サイトはそうとしか思えないような斬り方をする。

「サイト…、そのまま動くなよ

『月影流 鎌鼬かまいたち』

「え…？ ちよ、ちよつと待つて… うわっ！」

ソウマが放つた真空の刃がサイトの持つ木刀に当たり、一部が粉々に砕け散った。

「サイト、その状態でもまだ体は軽いか？」

「え…？ ああ、軽いまだな…、って… わきの当たつてたら死んでたんじやないか！？」

「安心しろ、死なないよう手加減はしていた。それに木刀にしか当たらない様にも調整していた。

だがそのおかげでわかつたぞ、サイト

「そ、そつなのか…。で? なにが?」

ソウマには何かわかつたようだが、サイトには理解できていなかつた。

「木刀の変わりに、この石を持ってみろ」

「おつと。で、この石に何かあるのか? もしかして特別な力を持つた石とかなのか!?」

ソウマが放り投げた石を受け取り、色々な角度から確認するサイトだが、特に何かありそうにも見えない。

「いや、先ほどセコで拾つたただの石だ。それより何も感じないか?」

木刀を持ったときのように体は軽くなつたりしないか?」

「いや、しないなあ」

ただの石、その言葉に少し肩を落とすサイトはこの石に何の意味があるのか考えていたが、まったくもつてわからなかつた。

「…サイト、その石は何に見える?」

「え? ただの石じゃないのか?」

道端に落ちている石を、特別な石だという人は居ないだろう?…、もしかして宝石の原石とかか?

だけが、どうでも普通の石にしか見えない……。

「ただの石だが、それを人に投げたら？」

「当たり所によつては、怪我するかもしれないな……」

「そうだ、石は人に投げれば怪我をさせることが出来る、俺が本気で投げれば人を殺せるだろう。

つまり、石は武器になるということだ」

「なるほどー、って、おー！？ 体が軽くなつたぞ、ソウマー。」

サイトは石を持つことで体が軽くなることに驚く。

先ほどまで何も感じなかつたが、今は木刀を持つてこむと感じる回りぐらい体が軽くなつていた。

「つまりはソウマーことだ、どんな物でもサイトが武器として認識すれば…、ルーンは発動する。

逆にお前が武器として認識しなければ、ルーンは発動しない。わかつたか？」

「ああー。」

ソウマーの説明にサイトは領き納得する。

「本題だ、サイト。 お前を鍛えてやる。」

「えつー… なんでそんな話こー。」

「こいつは武器を持ったから強くなるとはこゝ、武器がないときの対

処ができるだろ？

せめて武器を持つていなくても、自分の身ぐらいで自分で守れるようになるためだ

「なるほど～、何から何までなんでも、ソウマ

戦場…、があるかは知らないが刺客が送られる」ともあるんだ、自分の身を守ることぐらいはしてもらわないとな…。

それに元日本人として、同郷の者に死なれるのは気持ちのいい物でもない。

「気にするな。では、手始めに五キロ走って、腕立・腹筋・背筋をそれぞれ五十回を三セットやれ。

後は一日毎に距離と回数を倍に増やして、最終的には今日の十倍をこなせるようになれ、異論は認めん」

「…もう少しあと減らない？」

いきなりその訓練量はちょっと多い、そりやうサイトだが…。

「サイト、お前には時間があるだろ？…それに強くなればモテるかも知れないな…」

「やる… やりせて頂きます… うおおおおー…」

最後の一言を聞くとサイトは全力疾走して走っていった。
なんと単純な…、おまけに考えなしに長距離を全力で走るとは…、
だがアレだけやる気があれば大丈夫か…？

「ちょっと… 勝手に私の使い魔に変なことさせないで…」

背後から声が聞こえ、振り向くとそこには怒った顔をしたルイズが居た。

「ミス・ヴァリエールか？ 丁度良い、君にも少し言つておきたい事がある」

「な、何よ？」

怒気を孕んだ俺の言葉にルイズは少しじぶべ。

「なぜ彼を召喚したんだ？」

「知らないわよ… 召喚したらアイツが出てきちゃったんだから…」

「知らない？ 自分で呼び出したんだろう？ こいつは頭がおかしいのか？ それともこれが正常なのか？

ルイズの無責任な言葉にイラつきながらも告げる。

「だが、君は戦う術も知らないただの平民を呼び出したんだ。

彼にだって家族は居るだろ？ それを君は自身の都合で呼び出し、家族から引き離した。

その意識が今の君にはあるか?」

「そ、それは……」

誰だつて本人の意思を無視して家族や大切な人と引き離されれば怒るだろう。

だが、ルイズはそんな事を構いなしにサイトを呼び出し、本人の意思を無視してこの世界に繋ぎとめた。

おまけに家畜同然の扱いをしながら……。

「サイトの居た世界と違い、この世界は魔法が使えないものを家畜同然にしか扱っていない」

そんな彼がこの世界で生きていくには、鍛えるしかない……。

魔法が使えないでもメイジに勝てるぐらい……、それぐらいの権利は彼にあっても良いだろう?」

「わかったわ……」

先ほどからずいぶんと素直だが、自身がやったことに罪の意識でも感じているのか?

そんなのを感じるよりも、サイトが元の世界へ戻るまで、生活をまともな水準にしてやればいいのだが……。

「ああ、紹介が遅れたな。俺の名前は月影 双馬、タバサの使い魔だ」

「私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。

ソウマ、貴方ならルイズでいいわ」

「では、これから毎日サイトを鍛える、鍛えている時間だけは自由にさせてやってくれ」

ルイズは俺の言葉に頷き、学院へと戻つていった。
外ではサイトがまだ走つていたが全力疾走は堪えたのだろう、自分
のペースに戻して走つていた。

Side·Out

六話目 訓練（後書き）

まだまだ、精進いたします。

八話目 藍視（前書き）

まだまだ稚拙な部分や至らないところもあるとは思いますが、お付き合い頂けると嬉しいです。

サイトを鍛え始めてから、約一週間ほどが経過していた。午前中は体力作り、午後には組手や木刀を使った実践形式の訓練を行っていた。

「はつ！」

サイトは木刀を両手で低く構え、地面を蹴つて間合いを詰める。瞬く間に懷へ潜り込むと同時に下段から斬り上げた。

「ふつ」

だが、それを見越していたソウマは木刀を持った腕に力を込め、斬り上げる瞬間を狙つて打ち落とす。

相殺^{シカツ}にはならず、サイトの足元には穴が空き、そこに持つていた木刀がめり込んでいた。

「痛つてー！ ソウマ、少しば手加減してくれよな！」

サイトは赤く腫れ上がった両手に、息を吹きかけながら抗議する。

「ぎりぎり折れないように加減はしていた。 していなければサイトの両手は失くなっているわ。

それよりサイトはもう少し戦い方を考えろ、特に下段から仕掛けるなら足を狙え」

「そ、そうなのか…。 にしても、速さを生かした攻撃だと思った

んだけど…。

力負けしない攻撃手段を考えないとダメかあ

ソウマから貰つたポーションを手に塗りながら、上段や下段からの攻撃方法を頭の中でシミュレートする。

「ふむ、そこまで理解しているなら大丈夫だな、今日はここまでにしよう。

俺は戻るが、疲れを残さないよつてマッサージを忘れるな？」

「ああ、わかった」

芝生に座り込んだサイトは指から手にかけて、念入りにマッサージをする。

以前、マッサージが面倒になり適当にこなして寝たところ、翌日は筋肉痛がひどく立てないほどだった。

その日以降、訓練の後はマッサージを欠かさず行つよつとしていた。

扉を開け部屋の中に入ると、静かに本を読むタバサがいた。

「タバサ、待たせたな。図書館に行こつか

「うん」

日課の訓練が終わつた後はタバサと一緒に図書館へと足を運んでいた……。

初めて来た時に手に取つた本を見て氣付いたことだが、驚くべきことにこの世界の文字が読めた。

ルーンの影響か不明だが、文字の勉強をしなくて済むのはありがたかった。

「ふう……これも駄目だな。やはり、すぐには見つからないか」

小さくため息を吐き、ソウマは手がかりすら掴めない状況に少し氣落ちした表情を見せる。

タバサは持つていた本を閉じ、奥に見える扉に指をさす。

「奥の書庫にあるかも知れない。けど、閲覧には許可が必要」

最近は毎日のように通つ図書館では人の姿をほとんど見かけず、受付に司書もいない有様だ。

そのため静寂に包まれた館内のある扉は、不気味な雰囲気が漂つているように見えた。

「タバサは入つたことあるのか？ それに、ここには司書がいないのか？」

「ない。司書がいない代わりに学院長が管理してる」

入口の扉を開ける際に『アンロック』を使つていたことを思い出す。

図書館の入口と同じ様に奥の扉にも魔法で施錠されているのだろう。

「その人物はすぐに閲覧許可をくれるような人なのかな？」

タバサは首を横に振る。

「なら、今は閲覧できる範囲で探すしかないな」

ソウマは持っていた本を机に置き、まだ読んでいない本を手に取つて開く。

タバサも本に目を戻し、二人の間に会話がなくなると辺りに静けさが戻る。

それからしばらくの間、本を読んでいるとタバサがポツリと呟く。

「ソウマは…、どうして元の世界へ戻りたいの？」

「仲間に戻ると約束した。それを反故するわけにはいかない。…と、言いたいところだが向こうでの目的は果たしている。ラムザ達と連絡が取れれば十分だ」

「ほ、本当…？」

椅子を押しのけるようにして突然立ち上がり、タバサの声が館内に響いた。

「あ、ああ、本当だ」

突然の大きな声に少し驚きながらソウマは答える。

その言葉を聞いたタバサは何かを思い出したかのようにして呟く。

「…遠見の鏡があれば異世界を見れるかもしない。 だけど、か

なり希少」

「遠見の鏡の資料は？」

「「」の場にない。 あるとしたら奥の書庫

「また奥の書庫か…。 だが、可能性が見つかっただけでも良しと
しよう。

今日はもう遅い、学院長には明日許可を貰いに行こう。

ソウマの提案に對してタバサは首を振る。

「ダメ、明日は虚無の日で学院も休み。 それに明日は町へ行く、
もちひんソウマも一緒に」

絶対に譲れないと真剣な口調を強めて言
い放つ。

「わかった。 許可を貰いに行へるのは次回にして、明日は買い物に
付き合おう」

すぐに調べないと資料が無くなるわけでもない、時間のあるとき
に許可を貰つて調べればいいだろ。

それに、せっかくの休日を俺の都合で潰すわけにもいくまい。

「買い物ついでに武器を買つてもいいのか？」

「わかった、案内する」

「ああ、頼む。 明日の事も今後の事も決まつたところで部屋に戻

る

「うん」

一人が図書館の外へ出ると、ソウマの腕に何かが絡み付いてきた。

「そう引つ付かれると歩きにくいんだが、離してくれないか？」

「いや」

「そうか、嫌なら仕方ない」

振りほどくことを諦め、腕を組んだまま部屋へと戻つていった。途中でキュルケがその光景を目撃して何か言つてきたが、無視して部屋に入るとキュルケもついてきた。

その後、なぜか買い物にキュルケも一緒に同行する話になり、少し不機嫌そうな顔をするタバサだつた…。

その夜、タバサの部屋から抜け出す一つの影があつた。

タバサの部屋から広場へ移動すると、学院の出入口の門とは逆方向にある塙を飛び越えて外へと出る。

学院から離れるように森の中を走つていると、後方から追いかけてくる気配を感じた。

「監視は一人…いや今日は一人か…」

咳くと同時に動きを止め、後ろを振り返る。が、そこには木々がひつそりと佇むだけであつた。

タバサの使い魔になつてから監視されていることに気付き、毎晩その監視者の始末していた。

「気付いていないとでも思つてゐるのか？隠れてないで、さつさと出できたらどうだ？」

「いやはや、お見事ですな。これでも自身はあつたのですが…」

木々の隙間から現れ、ソウマに歩み寄る…その人物はコルベールだった。

「コルベールか、何の用だ？」

「こんな夜更けに学院の外へ向かう貴方をみて、何か良からぬ事でできるように右手に杖を持つていた。

「良からぬ事…ね。コルベールは気付いているか？」

「何をですか？」

含んだ笑いを見せて言い返すコルベールに、ソウマは言葉を返す。

「そうだな…、これから行う事はあなたの生徒を助ける行為だ。
そんな事をしなくても助けられる自信があんたにあるなら止めて
もいい。どうする?」

「それは…」

「ゴルベールは少し思案するが、ソウマは考える暇を『えない』。
「すぐに決断出来なければ諦めろ、そのまま逃げられても困るので
な」

もうゴルベールに叫ぶとソウマは『テレポ』を使う。

「ソウマ殿…?」

忽然とソウマの姿が消えたことに驚き、狼狽するゴルベール。
ソウマは一瞬にして木の陰に隠れていた人物の背後に移動してい
た。

「 セーナらだ」

突然の背後からの声に逃げよつとする監視者だったが、既にソウ
マの腕が首に巻きついていた。

助けを求める声を出す間もなく、『トキッ』といつ音と共に監視
者の首はあらぬ方向に曲がり倒れた。

『悠久の時を経てここに时空を超えよ、我にその扉を開け。 デジ
モン』

詠唱が終わると倒れている監視者を中心に黒い円状の渦が広がり、

徐々に沈んでいく。

監視者の体が見えなくなると、渦も一緒に消えたのを確認してコルベールの下へと戻る。

「ソウマ殿、殺したのですか…？」

「ああ

ソウマの行動を見ていなかつたコルベールだが、気配には気付いていた。

そのため、突然消えた気配に困惑しつつもソウマが何かしたのだ
らひとつわかつっていた。

「そう…ですか…」

「人を殺すのが嫌なら人と関わるな。 それが出来ないのであれば、
諦める」

そう告げるとソウマは学院へ戻るべく、森の中へ消えていった。
ソウマの言葉を聞いたコルベールは、沈痛な面持ちでその場に立
ち去っていた…。

八話目 監視（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

九話目 買物（前書き）

性格等の改変もありますので、ご了承ください。

上空

「おー！ すげー、空飛んでるよー！」

「サイト、うるさこわよー 静かにしてなさいー！
……なによ折角、馬を用意したのに」

サイトは子供のようにはしゃいでいた。今、シルフィードの背
に乗つて空を飛んでいるからだ。

しかし、用意していた馬が無駄になつたルイズの「機嫌は斜めだ
つた。

「馬で行く予定だったところをシルフィードに乗つて楽が出来たん
だから、少しば喜びなさいよ。

それとも、馬のほうが良かつたのかしら？

ルイズは『レビューション』使えないから、落ちたら大変だもの
ね？」

キュルケに言われずとも、風竜に乗れたことは嬉しかった。
だが、ルイズにとつてはキュルケと一緒に乗つていることが問題
であり、不機嫌になる原因でもあつた。

そんなルイズを余所に、キュルケはソウマの腕に抱きつく。

「あまり引っ付くな、本が読みづらい」

「嫌よ、狭いんだから話したら落ひちやうじやない」

幾ら竜とは言え、まだ幼体であるシルフィードの背中に五人も乗ると少し窮屈だった。

ソウマも文句は言つが、振りほびりとはしない。 その態度に甘え、キュルケは離れようとしなかつた。

「どうしてこうなつた……」

小さくつぶやくタバサの声は風に消され、誰の耳にも届くことは無かつた。

本来なら一人で買い物に行く予定だった。 だが、前日にキュルケが加わり、さらに当日になればサイトたちが加わって、気付けば五人で買い物に行くことになつっていた。

（ソウマと一人つきりの買い物をする予定が……）

そんな気持ちと共にシルフィードが下降を始める。

「…着いた」

「ずいぶん速かつたわね」

「ふんー」

「いやー、気持ちよかつたー」

町の近くに降り立ち、皆の想いはそれぞれ違つていた。

「シルフィード、『くわいわくわく』。 しばらく空で待機してくれ」

頭を撫でながら、シルフィードをねぎらっていた。

嬉しそうに返事をすると、シルフィードは翼を広げ再び空へ舞い上がつていった。

「先に武器屋に行く」

ソウマの腕を引っ張り、タバサは街に向かい歩き始める。キュルケ達も置いて行かれまいと、慌てて追いかけていった。

「「狭い」」

街に入るなり、ソウマとサイトの発した声が重なる。

「何行つてゐるのよ、ソウマはトリステインで一番の大通りなのよ？」

大通りとは言つものの、馬車一台通るのがやつとの広さである。その上、多くの人が行きかい、路上に店を開いている者もいるため余計に狭く感じさせる。

「ゲルマニアはもつと広いわね」

「そ、そつと武器屋に行くわよ！」

誤魔化すように言つと、ルイズは裏道へと急ぐ。その後をソウマ達は呆れた様子でルイズについて行く。

裏道に入ると、こちらをじつと見つめる浮浪者が所々に隠れている。

「ソウマはスリが多そうだ、あまり長居しないほうがいいな」

「サイト、盗まれないでよ?」

「大丈夫だよ。ソウマにも鍛えられてるし、早々盗まれないって」

両手に花状態のソウマは身動きが取れそうになかった。なにせ両腕をふさがれているのだから。

そして、しばらく歩くと剣を模した銅の看板が飾られた建物が見えた。

「あつたわ」

そう言って、ルイズを先頭に武器屋へと入る。中は意外と広く、壁や棚に短剣から斧まで飾られていた。

奥のカウンターには店主がパイプをふかしていたが、ルイズ達を見かけるとパイプを置いて営業スマイルを浮べる。

「密よ

「これは貴族様、うちのような店にいらっしゃるとは珍しい。して、どのような物が御入用で?」

「使い魔に剣を持たせたいの、何かいい剣はないかしら?」

「へい、このバスター・ドソードなんか如何でさあ?」

店主は貴族の来訪に驚きもせず、落ち着いた態度でルイズに対応していた。

「ツヴァイハンダーにハルバートまであるのか……」

ソウマは店の中を見回し、棚や壁に規則正しく飾られている短剣や長剣、槍等を眺めていた。

飾られている武器には装飾が多い。

ソウマは抜き身で飾られている、鎧び付いた一本の剣に目を留める。

「店主、この剣は？」

ソウマの言葉に、店主の目が怪しく光る。

「へい、残念ですがその剣はナマクラなんですね。鎧びは落ちない、切れ味も悪い、その上「オヤジ、ナマクラはねーんじゃねえか？」…喋りやがるんですよ。面白いもんですか？」

突然、壁に飾られていた鎧びた剣が柄を力チカチと鳴らして喋り、店主に抗議する。

ナマクラと言つた店主は、剣を見ながら笑つていた。

「インテリジョンスソードなの？」

「へい、意思を持つ魔剣、インテリジョンスソード。名前を『デルフリンガー』と言います。

誰が考えたかは知りませんが、剣に意思を持たせるなんて面白い事をする奴もいたもんです」

ソウマは壁に掛けてあつたデルフリンガーを手に取り、鎧び付いた剣身を幾つか角度を変えて調べる。

（剣身から鎧びが浮いている？

おまけに鎧びが付いていない部分は新品に見えるな）

『デルフリンガーは何かに気付き、ソウマに向かって話しかけてくる。

「兄ちゃん、おめー本当に人間か？
それに兄ちゃんはちげーみたいだが、近くに使い手がいた気配がするな」

ソウマは問いに答えず、『使い手』の言葉に反応してサイトを見る。

サイトを近くに呼び、『デルフリンガー』を渡す。すると左手のローンが光始めた。

「おでれーた、おめ使い手か！」

「使い手ってなんだ？」

「いいか使い手って言つのはな……なんだっけか？
力力力、六千年も生きてると忘れちまつことが多いんだ。
まあ、気にすんなそのうち思に出すだら、とにかく俺を買え」

呆れた顔で皆は『デルフリンガー』を見ている。
だが、当の本人は気にした様子もなく、自分を購入させようと勧めてくる。

「わかったよ。ルイズ、これ買つていいか？」

「そんなので良いの？ 鑄びてるし、すぐに折れちゃうんじゃない？」

「いや、錆びてるけどトルフは丈夫だと思つ」

サイトの言葉に、疑いながらもルイズは渋々承知する。

「しょうがないわね。店主、この剣は幾ら？」

「金貨百枚、それ以上はまかりやせん」

「あら、安いわね。ならこれでお願い」

カウンターに金貨の入った袋を置くと、店主が金貨の数を数える。

「へい、丁度。鞘とこからはおまけで、」
「これやす」

「あら、気前がいいのね」

「いえいえ。デル公、元氣でやれよ？」

「おめーもな、オヤジ」

店主はデルフリングガー用の鞘と小型のダガーを取り出す。
サイトはそれを受け取るとダガーを腰に付け、デルフリングガーを
背中に背負う。

デルフリングガーを鞘に收める際に「ちょっと待て！」といつ声が
聞こえたが、気にしない。

「ルイズ、ありがとな」

頬を少し赤く染め、「どういたしまして」とか細い声でルイズは
言つ。

一方、ソウマは壁に掛けてあったクレイモアを取り、カウンターへ置く。

「これでよろしいので？」

店主の言葉に違和感を覚え、聞き返す。

「これ以上の物がこの店にあるか？」

ソウマの返答に店主はニヤリと笑う。

「少々お待ちください」

店主はそう言い残すと、店の奥へと入つて行く。そして、戻ってきた店主の手には大きな剣が握られていた。

先ほどのクレイモアと比べ、長さは同じ位ではあるが、剣身の部分は倍以上ある。

しかし、装飾がなく実用性のみを追求したような武器だった。

「お待たせしやした、こちらの剣になりやす。この剣の大きさ、重さ、普通の人間にはまともに振れやせんでしょう。

おまけに調べては見たんですけど製法も素材も不明なもんで、固定化を何重にもかけていやす」

「大きい……けど、ソウマなら振れる？」

ソウマは無言で剣を持つと、その場で剣を振るう。振り下ろした剣から出る風圧が、タバサやキュルケ達の髪をふわりと撫でる。

両手ではなく、片手で剣を振っている事に全員が驚愕していた。

「店主、この剣の名は?」

「そ、そいつは対人用というより、対竜用に作られたようにも見えるんださあ。

ですからあつしは竜殺しの剣と呼んでやす

「さうか、なうこの竜殺しの剣を貰おつ。幾らだ?」

「元々売り物ではありやせんので、御代は頂けやせん

「タバサ、今幾ら持つていい?」

「剣を買つたために持つてきたのは金貨三三百枚」

「それを店主に渡してやつてくれ

タバサは頷き、受け取ろうとしない店主に金貨の入つた袋を押し付ける。

「店主、また来る」

渋い表情を浮かべる店主に、ソウマ達はさう告げて外へと出て行く。

「いい買い物をした。で、次は何処に行く予定だ?」

「私とサイトの買い物は終わつたから後は好きなところへいわよ

「本屋に行く」

裏通りから大通りへと戻り、本屋へと向かつ。

到着するとすぐに済むという事でタバサ以外は店の外で待つていた。戻ってきたタバサにキュルケは何の本を買ったのか尋ねるが、幾ら聞いてもはぐらかすだけで、教えてくれなかつた。

「それじゃ、学院へ戻りましょ」

キュルケの提案に全員が同意し、シルフィードの待つ場所へ移動する。

街の外へ出てすぐにシルフィードが空から降りてくれた。タバサが本屋に行つてゐる間に買つておいた干し肉を、シルフィードの頭を撫でながら食べさせる。

「荷物が増えてるが、帰りも宜しくなシルフィード」

「なんかシルフィードがソウマの使い魔みたいに見えるわね。その辺使い魔の主としてどうなのタバサ?」

「問題ない」

全員を乗せるとシルフィードは空に飛び立つ。

「サイト、デルフリンガーと少し話をさせてくれないか?」

「別にいいけど?」

サイトがデルフリンガーを抜くと、

「相棒！ いきなり鞘に入れちまうなんてひでえじゃねえか！」「

「ああ、すまん。でも剣は鞘に収めるもんなんだからいいじゃんか」

「話してるとこ悪いが、デルフリンガーちょっと聞きたいことがあむ」

「おう？ なんだ兄」「ソウマだ」…ソウマ

デルフリンガーの声を遮り、名前を告げる。ソウマの威圧に耐えれず素直に呼ぶデルフリンガーだった。

「で、聞きたいことってのは何だ？」

「折角使い手と出合えたんだ、いい加減錆びた振りはやめたひどうだ？」

「幾ら六千年たつたとは言え、部分的に錆びるなんて事があるはずないだろ？」

「……よく気付いたな？」「

相棒もなんとなくはわかつてたみたいだが、まだまだな

デルフリンガーは剣身から光を放つと、錆びが浮き上がりそのまま消滅する。

「どうでー、相棒？ これが真のデルフリンガー様の姿よー。」「

その言葉通り、錆び一つない研ぎたてのような剣身になるデルフリンガー。

見ていたルイズ達は「よかつたわね」と平然と告げるだけであった。

「うーん、最近は驚く事が多すぎて……ちょっと拍子抜けした。まあ、これからも直しくな『テルフ』！」

「直しくできるかあ——！」

サイトの言葉に怒ったテルフリングガーの声が空に響き渡った。

九話目 買物（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

十話四 十塊（前書き）

ずいぶんと長くなってしまった。まことにました。

夜

「こりゃ、厄介だね……」

フーケは自分の背より大きな宝物庫の扉を見て呟く。
複数人のスクウェアが扉に『固定化』をかけたため、自身の『鍊金』では歯が立たない。

「はあ、アタシの『ゴーレム』でも歯が立ちそうにないよ

とある人物から扉以外は物理的な衝撃に弱いという情報を得ていた。

実際に見るとゴーレムでも壁を破れない事がわかり、ため息を吐くしかなかつた。

（人の気配！？ あれは…、たしかソウマとか言う使い魔だったね。
あんな所で何を？）

フーケは扉近くの影に隠れ、そつと様子を伺う。

「ルイズ、こんな所で魔法の練習か？」

「私が魔法の練習をしてたら悪い？」

ジロリとこちらを睨むルイズの表情は苛立つている様に見える。

「そんなことはない、努力の積み重ねが結果を生むものだ。努力するものを貶す様な事はない。

しかし、一つ聞きたい。 魔法は失敗すると、爆発するもののか？」

「違うわ、失敗すると何も起きないわ」

ため息を吐きながら、「ほら」とルイズは自嘲気味に田の前の石ころを見せる。

『鍊金』の対象にしていた石なのか、その辺に落ちている石ひとつ変わりは無さそうだった。

石を見ながら、ソウマは自分の考えを話す。

「四系統の魔法が全て爆発になる。しかし、爆発は失敗では無い。結論から言えば、四系統以外ではないのか？ もう一つの系統、虚無があるだろ？」

「ふう、何を言つたと思えば……。私が虚無なんて、在り得るわけ無いでしょ？」

呆れた表情を浮かべながら、ルイズは首を横に振る。

「『サモン・サーヴェント』で人を召喚するなんて、本来は在り得ないんだろう？」

しかし、今回は人間であるサイトが召喚された。なら在り得ない事はない……、違うか？」

「で、でも、虚無は伝説の魔法なのよ？ 私なんかが使えるわけがないじゃない」

ルイズは否定するも、動搖は隠せなかつた。

「黙れもとで試してみたらいいじゃない？」

今度は爆発せずに上手くいくかもしれないわよ？」

声のする方向へ振り向くと、そこにはキュルケとタバサが立つていた。

「キュ、キュルケ？ どうして此処に？」

「偶然見つけたんだけど、接点の少ないルイズがソウマと一緒に何をしてるのかなと思ってね？」

気になつたからタバサと一緒に隠れて聞いてたけど、色氣の無い話ばっかりなんですもの」

両手を上げながら、呆れたようなポーズをするキュルケ。
じぶらべりとするとルイズだが、馬鹿にされている事に気が付き反論する。

「い、色氣の無い話で悪かつたわね！」

「そうだ！ キュルケ、そんなに言つなら貴方に虚無（仮）の魔法を体験させてあげる！」

「え？ ルイズ！ ちょ、ちょっと待ちなさいってばー！」

冗談じゃないと、慌ててルイズを止めようとするキュルケだが、

『鍊金！』

静止も聞かずに、ルイズはキュルケに向かって杖を振る。しかし、キュルケには何も起こらず無事だった。

代わりに、背後にある本塔から大きな爆発音が聞こえる。

「おかしいわね、ちゃんとキュルケを狙つたつもりなのに……」

再度、杖を振ろうとするルイズを、ソウマが手を掴み止める。隣ではキュルケが安堵の息を吐いていた。

先ほどの爆発で本塔の壁に小さな亀裂が入っていた。
それを見たフーケはニヤリと笑い、すぐさまゴーレムを『鍊金』する。

「亀裂を狙いなー！」

ゴーレムが亀裂を狙つて拳を叩きつける。するとあつさり壁が崩れ落ち、宝物庫への道が開けた。

即座に中へ入り込むと、フーケは他の物には目もくれず田畠での品を拾い上げる。

フーケは壁にサインをしてゴーレムを置いたまま、宝物庫から逃げ出した。

「『ゴーレム！？』」

突如、本塔に現れた全身三十メートル程のゴーレムに全員は驚きの声を上げる。

「タバサ、後は頼んだ」

ソウマは背負っている竜殺しを抜き、ゴーレムに向かって駆け出す。託されたタバサに応える暇は無かつた。しかし、すぐにタバサは口笛を吹いてシルフィードを呼び寄せる。シルフィードが到着する頃には、ソウマがゴーレムと対峙していた。

「無駄にでかいな、術者を叩きたい所だが……そう簡単にはさせてくれないか」

ソウマに気付いたゴーレムは、拳を高速で打ち下ろしていく。その巨体に似合わぬ速度で繰り出す拳を、ソウマは左右に飛びながら避け続ける。

「ふつー！」

攻撃を真上に飛んで避け、そのまま落下的速度を利用してゴーレムの腕に剣で叩き斬る。

腕を失ったゴーレムの動作が一瞬止まつたかと思つと、すぐさま腕が再生して元通りになる。

斬り落とされた腕を見れば、既に土へと還つていた。

「再生するのか……、相手するだけ時間の無駄か」

「ゴーレムから下がつて間合いを取り、持つていた剣を地面にさす。

ソウマは追つて来ないゴーレムに向けて両手を突き出すと、

『虚空の風よ、非情の手をもって人の業を裁かん！ ブリザラー。』

魔法を唱え終える。周囲の温度が徐々に下がり、ゴーレムの足、
胴、腕、頭と順に凍り付いていく。

ゴーレムには抗う術も無く、その姿を氷像へと変えていった。
動けなくなつたゴーレムの脇を通り抜け本塔へ入るが、

「ちつ、気配はもう無いか……」

既に人影は無く逃げられた後だった。

「ソウマー。」

「すまん、逃げられた」

「そんな事より、アレは何？」

駆け寄ってきた三人が、そろつて氷像となつたゴーレムを指差す。
ソウマはゴーレムの氷像だと告げるが、三人はそうじゃないと言
う。

結局、その日は夜遅くまで質問攻めに遭うソウマだった。

翌朝、学院長室には教師と田撃者であるソウマ達が集められていた。

「田撃者はこれで全員かね？」ゴルベール君

「はい。サイト君は田撃者ではありません。ですが、ミス・ヴァリエールの使い魔ですので連れてきています」

「よいよい。それにしても、こんな時にミス・ロングビルは何処いたんじや」

「やついえば、朝から姿を見ておりませんな」

周りの教師も同じように見ていないと口を揃える。そこに当の本人が息を切らせて駆け込んで来た。

「お、遅れました。申し訳ありません」

「おお、ミス・ロングビル。何処へ行つておつたのじや？」

「今朝方、宝物庫に賊が入り込んだと騒ぎを聞きましたので、調査していました。

その甲斐あって、居場所を突き止めるに成功しました」

結果、賊は学院から馬で四時間ほど森の廃屋に潜伏している事がわかつた。

「つむ、それでは捜索隊を編成する。我こそはと言つ者は杖を掲

げよ

しかし、誰一人として杖を掲げようとする者はいなかつた。オスマンは教師達を見るが、皆そろつて目をそらす。

「このままでは時間の無駄だ、俺が行こう」

「な!? つ、使い魔如きが勝手に口を開くな!」

「はつ、魔法がなければ何も出来ない連中に、文句を言われる筋合
いはない。

それとも、代わりにアンタ等が行くか?」

途端に口^ヒもる教師達を、ソウマは鼻で笑う。

「私も行く」

「なら、私も行こうかしらね」

「私も行くわ!」

タバサ、キュルケ、ルイズが次々と杖を掲げる。

「うむ、ならばお主達に任せよう

オスマンは頷くと、教師達を部屋の外へと追い出す。

追い出されたのはコルベール、ロングビルを除く教師達だった。

「すまんのう。本来なら教師の役目なんじやが、如何せん自尊心
だけしかない連中じやて」

「別に構わない。 それより、 盗まれた物の詳細を教えてくれ」

謝罪するオスマンに対し説明を促がすソウマ。

「うむ、 名前は『破壊の杖』、 普段はケースに入つてある。 ケースの中身は茶色い筒状の杖で、 全長は大体三十サン^{センチ}ト位じや」

「それだけ分れば十分だ、 準備が済み次第向かう」

捜索隊のメンバーが決まり、 皆準備のために部屋へ戻つていった。

正門前

正門前には捜索隊メンバー全員が集まつていた。

「目標は『破壊の杖』の奪取。 お主等の働きに期待してある。 しかし、 死ぬ事はまかりならん、 必ず生還する事じや。 では、 幸運を祈る」

オスマンに見送られ、 全員が屋根の無い馬車に乗り込む。 そして、 ロングビルを案内人として捜索隊が出発する。 しばらく馬車に揺られていると、 キュルケが独り言のよつに呟く。

「それでいても、ソウマが魔法使えるなんて……」

「えっ！？ ソウマは魔法使えるのか？」

「昨夜、その場にいなかつたサイトが驚く。

「まあな、メイジでは無いと言つたが、魔法が使えないとは一言も言つてない」

「そう言えばそうだな。 なにせ、ソウマはどんな魔法が使えるんだ？」

「火、水、氷、土、風、雷、毒、聖、闇の魔法は大体使える。 他に特殊な魔法もあるがな……」

サイトを除いた全員は開いた口が塞がらない。 ハルケギニアには属性が虚無をあわせた五つしか存在しないため、驚くのは当然だった。

「聖と闇……、聞いたことない。 どんな魔法？」

「使う機会があれば見せてやる。 それまでは我慢しろ

「わかった」

納得の言葉を口にするが、表情と一致しないタバサであった。

突然、馬車が動きを止める。

「皆さん、ここから歩いて少し行った所に廃屋はあります」

ロングビルが指差す方向には、つうそうとした森が広がっていた。
一行が森の中を歩いていると、一軒の廃屋が見える。
とてもじゃないが、人が住んでいるようには見えなかつた。

「申し訳在りませんが、私は馬車のところまで避難させて頂きます
ね」

「ええ、案内ありがと」

ロングビルは一礼すると、来た道を戻つていつた。

「サイト、俺は周囲を偵察していく。 廃屋の方は頼んだ」

「え？ ちよっと、ソウマ！」

サイトの呼びかける声がむなしく響く。
ソウマは既に森の中へと消えていた。

「私達は空から援護する。 サイトは廃屋を見てきて

声は後ろではなく空から聞こえる。

見上げると、タバサ達はシルフィードに乗つて空を旋回していた。

「俺一人かよ……、トホホ」

デルフリンガーに手をかけながら、慎重に廃屋へと近づいていく。
はやる鼓動を抑え、扉をそつと開く。
中を除くが、そこに人影らしき者は見当たらなかつた。

「ふう、誰もいないじゃんかよ」

扉をくぐり、置いてあつたケースに手を伸ばす。

しかし、手に取った拍子にケースが開き、中身が地面に落ちる。慌てて拾い上げると、『破壊の杖』の情報が頭に入り込んできた。

「これは……、M72型のロケットランチャー？ なんだつてこんなのがこの世界に？」

初めて自分の世界に有る物と出会うが、それは対戦車用の武器だつた。

考えても仕方ない、そう思つて中身を戻してケースを手に取る、その時だつた……。

「サイト… 逃げて…」

悲鳴にも似た声に反応して、扉から勢いよく飛び出る。

しかし、そこにはゴーレムが待ち構えていた。

「やべえ…？」

ゴーレムがサイト目掛け拳を振り下ろすが、サイトは飛ぶよう

に転がり、何とか避ける。

「援護するから、そのうちに下がって…」

さりに攻撃を仕掛けよつとするゴーレムに向かつて火球と風の刃ファイアボーナ・カッターが降り注ぐ。

その攻撃はゴーレムを一瞬止める程でしかない。しかし、サイ

トにひとつではその一瞬で十分だった。

「ありがとう！」

急いで立ち上がり、ゴーレムから距離を取る。剣ではダメだと判断したサイトは、ケースからM72型のロケットランチャーを取り出すと、ゴーレムを狙つて構える。

サイトはゴーレムが自分の方を向く瞬間を狙い、トリガーを引く。

「みんな！ 耳をふさげ！」

耳をつんざく様な轟音と共に、大きな爆発がゴーレムを襲う。爆発によって起きた煙が晴れると、そこには上半身が吹き飛んだゴーレムの残骸があつた。

その光景を木の影から見て、笑みを浮かべる一人の人物がそこに
はいた……

「ふうん。『破壊の杖』は、ああやつて使うのかい……。
ガキ共が来る事になつた時はどうなるかと思つたけど、結果とし
てよかつたね」

『破壊の杖』を奪つたはいいが、使い方が分らない。
用途の不明な物は高く売れないため、フーケは使い方を知るもの
を呼び寄せたつもりだった。

「残念ながら、お前の思い通りには行かないがな？」

おつと、そのまま動くな。動いてもいいが、首と胴が別れを告げる事になるぞ」

突然背後から聞こえる声に焦るフーケ。

「なんだい、アンタ少女達と空にいたんじゃないのかい？」

「いや、お前が馬車へ戻る所から、ずっとつけていたのさ」

フーケは愕然とする。始めから見抜かれていた？そんな思いがフーケの頭を巡る。

「アタシを庇つかる気だい？」

「三つの選択肢をお前にやる。一つ目はこの場で俺に殺される。二つ目は捕まって処刑される。三つ目は俺に従つて生を得る。まあ、どれがいい？」

「く、選択の余地なんてありやしないじゃないか。三つ目を選ぶよ！」

毒づくフーケだが、未だ死ぬわけにはいかない。渋々、従う方を選ぶ。

（何、この男から逃げちまえば）このもんだ。わざわざ身を隠れて藏つよ

そんなフーケの心を読み取つてか、ソウマは抑えていた殺氣を開放する。

「逃げたければ逃げてもいいが、その時は楽に死ねると想つなよ？」

フーケは殺氣を感じるなり、周囲の温度が下がつていくのがわかる。

そして、気付けば自分の手足は振るえ、息苦しさを感じるほどであった。

（逃げる？ 冗談じゃない、そんなの無理だ。 たとえ地の果てへ逃げてもこの男は追いかけてくる…）

そう思わせるほど、ソウマの声には殺氣が込められていた。

「安心しろ、俺に従う限りはお前も守つてやる

フーケを取り巻く殺氣が消え、先ほどとは逆の暖かい空気がフーケを包み込む。

安堵の息を吐くと共に、フーケは意識を手放した。

「おつと、少し刺激が強すぎたか

フーケを両手で抱え、その場を後にする。 馬車に戻ると、タバサ達が『破壊の杖』を携えて待っていた。

「ソウマ… ミス・ロングビルに何があったの…？」

「すまない、ロングビルを人質に取られてフーケに逃げられた

即座に嘘をつぐが、周りに疑つものはないなかつた。

「全員無事、『破壊の杖』も取り戻した。問題なし、学院へ戻る」

タバサの言葉にその場にいた全員が頷く。

全員が馬車に乗り、ソウマが手綱を取つて森を後にした。

十話四 売塊（後書き）

まだまだ続きますので、楽しんでいただけたらと思いまや。

まさにひつじで、ト記の通りになつています。

サント＝センチ

メイル＝メートル

十一 話題 帰還（前書き）

今回も長めです。

内容的には薄いかも知れません。

目を覚ますと、目の前には星空が浮かんでいた。

「ルルは……？」

周りを見渡しながら起き上ると、そこは馬車の上だった。起きたばかりのせいか、頭がはつきりしない。

「ミス・ロングビル、もう起きて大丈夫なの？」

横には自分の事を心配そうに見つめるルイズがいる。自分が「ロングビル」と呼ばれた事で、フーケだとばれていない事を理解する。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配をお掛けしてすみません。ところで、私はどの位寝ていたのでしょうか？」

「あの森から出発して四時間位かしら？」

ソウマが手綱を握つてゐるから、少し速度が遅いのよ

「すまんな、揺れを減らすために速度を下げていたんだ。しかし、ミス・ロングビルも災難だつたな。まさかフーケの人質にされるとは思わなかつた」

ソウマの名前、そして声を聞き、本人の意思とは無関係に体が震

えだす。

同時に息も乱れ、上手く呼吸ができない。

「ミス・ロングビル、体が震えてるじゃない。
人質に取られた事がそれほど怖かったのね、もう少し休んだ方が
いいんじゃない？」

「い、いえ、大丈夫です。これ以上、心配をかけるわけにはい
きませんから」

なんとか呼吸を整え、震える体を手で押さえながら立ち上がる。
そして、おぼつかない足取りでソウマの隣へ移動する。

「と、隣、失礼しますね」

ソウマの隣に座つて気付く、反対側にはタバサがソウマ腕に抱き
ついていた。

目を瞑るタバサは眠つているのかわからない。しかし、嬉しそ
うな表情を浮かべていた。

そんなタバサを見ていたせいか、いつの間にか体の震えが止まつ
ていた。

（で、アタシは何をすればいいんだい？）

（トリステイン、アルビオンの情報収集を頼みたい）

（わかったよ。だけど、そんな事だけでいいのかい？
もっと、危険な事をやらされるかと思つてたけど……）

命がけの盗みをした事もあるフーケ。

しかし、内容を聞けばそれは拍子抜けしたモノだった。

(ナニコリのがお好みか?)

(そ、そんなわけ無いわ。 ただ、気になつてね)

(俺は二の世界に来て日が浅いからな、情報は出来るだけ集めておきたいだけだ)

(わかつたよ、時間の許す限り調査するわ。

それと、アタシのことはマチルダって呼んどくれ)

言に終わるなり、ソウマの膝を枕代わりに寝転がる。

(少し、眠らせてもらひよ)

ロングビルは疲れていたのか、すぐに寝息を立て始めた。
そして後ろの荷台を見れば、他の連中も気持ちよさそうに寝ている。

(やれやれ、気分は家族旅行帰りの父親か……)

学院に到着するなりコルベールが駆け寄ってくる。
夜でも月明かりによつて光る頭が眩しい。

「皆さん、『』苦勞様です。

首尾の方はいかがでしたか?」

「フーケには逃げられたが、『破壊の杖』は奪い返す事に成功した

荷台からケースを持ち上げ、コルベールに渡す。
思つていた以上に『破壊の杖』が重かつたのか、コルベールは一
瞬落としそうになる。

「では、私の方で責任持つて預かりますので、今日は各自部屋に戻
つて休んでください。」

明日の朝、皆さんは学院長室に集まつてください。」

言い終えると、コルベールはケースを持って本塔へ戻つていった。
少しふらついている様にも見えたが、大丈夫だろう。

「いい加減起きろ、学院に着いたぞ」

「は、はい。 すみません」

「眠い」

「もう朝なの〜?」

「ちい姉さま、もう少しだけ〜」

「ふああ、よく寝た〜」

すぐに起きるロングビル、タバサとは対照的に、寝ぼけた事を言
うキュルケとルイズ。

その中でもサイトは早く起きるわけでもなく、寝ぼけるわけでも

ない。

「サイト、ルイズを運んでやれ」

「あいよ~」

お姫様抱つこの要領で持ち上げるサイト。

そんな状況でもルイズは未だ夢の世界に旅立っていた。

「今日はこれで解散だが、明日の朝に学院長室へ集合だそつだ。忘れるなよ」

皆それぞれの部屋へと戻つて行く。 その場にはソウマとタバサが残つていた。

すると、タバサの元に一匹のフクロウが飛んでくる。

タバサはフクロウの足に巻かれた手紙を取り、中身を確認する。

「任務」

「内容は?」

「わからない、明日の毎に宮殿に来いとしか書かれてない」

そこでタバサは少し思案する。 既に母を救い出したため、従う理由はもうない。

だからこそ刺客が来る事はあっても、仕事の依頼が来るとは思つていなかつた。

「やうか、お前はどうしたい?」

「母様を取り戻した以上、受けれる必要ない。

けど、このまま放置すると学院に何かしていくかもしれない……」

相手の考えが読めず、不安だけが心に残る。

しかし、そんな不安を打ち消す言葉がソウマからかけられる。

「なら、受ければいい。何があつても俺が君を守るわ」

「うん」

首を縦に振り、そつとソウマの手を取つて握る。
握り返してくれるソウマに対し、穏やかな笑顔を浮かべるタバサ。

「さて、俺達も戻るわ」

一人は手をつないだまま、部屋へと戻つていった。

翌日

学院長室に捜索隊のメンバー全員が集まっていた。

「ふむ、フーケに逃げられたのは残念じやつた。

しかし、よくぞ『破壊の杖』を取り戻してくれた。これで一件落着じや」

オスマンは無事を喜び、全員の顔を順に見ていく。
そしてニヤリとほくそ笑み、オスマンは話を続ける。

「君等の功績を称え、『シユヴァリ』の申請しておいた。
と言いたい所じゃがのう。

フーケには逃げられてしまつた事もあるのでな、精靈勲章の授与
を申請しておいた」

途端にルイズとキュルケの表情が笑顔になる。
それを見て、オスマンも自然と笑顔が綻ぶ。

「オールド・オスマン、サイトとソウマ、それとミス・ロングビル
には何も無し?」

タバサに言われ、オスマンは少し困った顔をする。
逆にロングビルは自身がフーケであるため、複雑な表情を浮かべ
ていた。

「あー、何と言つかのう。三人は平民じゃからの、勲章の申請は
できぬ。

代わりにミス・ロングビルは賃金を上げよう。

そして、一人にはワシのポケットマネーで報酬を払おう

予め用意していたと思われる金貨の袋がサイトとソウマに手渡さ
れる。

中身を確認すると大体千エキュー程が入つていた。

「良かったわね、サイト」

「ああ、だけビ」の金貨はルイズが預かってくれ

金貨の袋を渡すサイト。

ルイズはサイトと袋を交互に見る。

「いいの？ これはサイト個人のお金になるのよ？」

「んー、信頼の証だと思つてくれればいいさ」

ルイズは一瞬呆気に取られながらも承知する。

「わかつたわ、しっかり管理してあげるんだから」

嬉しそうな表情を浮かべ、金貨の袋を抱きしめる。傍らで、ソウマが金貨の袋を道具袋に仕舞う。それを見たタバサが少し寂しそうな表情になる。

「うむ、それではこれで解散とする。 それと、今日は君等は授業に出なくて良い。

ゆつくり休み、夜は『フリッギの舞踏会』を楽しみなさい

全員が部屋を出て行く中、ソウマ、サイト、タバサが部屋に残つていた。

「タバサ、先に行つて準備をしててくれ。 すぐに行く

タバサは頷き、その場を後にする。

「ふむ、何か聞きたいことでもあるのかね？」

「ああ、ある。『破壊の杖』は一体どこで手に入れたんだ？
これは元々俺の世界で作られた武器に間違いない」

サイトの世界で作られた武器と聞いて、オスマンは話して良いものかと悩む。

あれほどの威力ある『破壊の杖』が、ハルゲキニアで作り出されれば戦争は必至。

真意を探るためにもサイトに聞き返す。

「お主は『破壊の杖』をなんだか知つておるのか？」

「これは『『破壊の杖』の名前は『M72 LAW』、使い捨ての対戦車用ロケットランチャー。」

そいつは旧式だが、後継機が現代でも用いられている。用途は少し変わってきているがな」…え？」

オスマンにとつては予想外の方向からの説明だった。

サイトもソウマが知つてているとは思わず、驚いた表情を浮かべる。
「ソウマ殿、お主はサイト殿とは別世界から来たと聞いておる。
それなのに、何故お主はサイト殿の世界にある武器を知つているのじゃ？」

先ほどの笑顔とは打つて變つて険しい表情のオスマン。
手に持つ杖からは今にも魔法が解き放たれんばかりの魔力が込められていた。
しかし、それを氣にも留めず言い放つ。

「それは、俺がサイトと同じ世界の元住人だからだ」

「な、なんと……」

オスマンは目を見開て愕然としていた。

しかし、確かに言われてみれば納得である。

同じ世界にいたのであれば知っていても不思議はない。

「ソウマは何人だったんだ？」

「サイトと同じ、日本人さ。普通の一般家庭に生まれ、そして死んだんだ……。

そう、夜も更けた会社帰りに、車や人通りの無い横断歩道を渡つた所を跳ねられてな」

ソウマの言葉に違和感を覚える。

安全を確認した道路で何かにぶつかるものか？
そんな事、あるわけがない。

「何に跳ねられたか覚えてないのか？」

「ああ、俺にもわからない。しかし、それとは別にわかつた事がある。

俺は死に、よく知る世界へ転生したという事だ」

「転生って、死んだら生まれ変わるってやつか？」

それに、よく知る世界つてまた日本人に生まれ変わったのか？」

ソウマは首を横に振つて否定する。

では、日本以外の国の人間に生まれ変わったのだろうか？
先を聞くために沈黙を保つていると、ソウマが口を開く。

「ゲームの世界だよ。

『丁寧に、日本人だった頃の記憶をおまけ付でな

苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべるソウマ。
ゲームの世界に転生した事……、どちらが嫌だったのかはわから
ない。

いや、両方が嫌だったのかも知れない。

「ソウマは何が嫌だつたんだ？」

俺はゲームの世界に転生したら大喜びすると思つたけど……

そう、ゲームの世界に入れるなんて憧れに近いことだ。
自分だつたらと想像した事は何度もある。
そんな考えを察してか、ソウマは続ける。

「サイトひとつで、このハルゲキニアの世界をじつ悪いつ？」

「この世界？ うーん、面白いとは思わないな。

貴族と平民だけじゃなくて、魔法の有無でひどく差別されるしな

隣で聞いているオスマンはバツの悪そうな表情を浮かべている。
別世界から来たサイトの意見に対し、申し訳なく思つていいのだ
わづ。

「結局のところ、サイトの想像してるゲームの世界もこの世界と変
わりない。

違うのは魔王がいない事位じゃないか？」

「魔王がいればこの世界もゲームの世界と変わらない……。
言われてみればそうか、この世界には魔法もあるし」

ゲームの世界と変わりない、その言葉にサイトは納得しているようだ。

オスマンは隣でなにやら気難しい顔をしている。理解が追いついていないのだろうか。

「サイトもゲームの世界に転生してみたいか？」

意識も記憶もある赤ん坊の姿で、魔物のいる森に捨てられてみたいか？

死ねばまた別の世界へ転生する。そんな人生を味わってみたいか？」

「い、いや、遠慮してくれ」

慌てて両手を振るサイト。どうやら想像していたものと違ったらしい。

悪い面ばかり押し付けられれば誰でも遠慮するだろう。しかし、良い面もあることこのはあった。それは……、

「だがな、死んで別の世界へ転生しても、前の世界の魔法や技は使えた。

それが唯一の救いと言えるところだな」

「てことは、記憶はずつと残つたままなのか？」

「そうだ。だからこそ、俺にはまだ日本人の頃の記憶が残つている」

「

サイトは「納得した」と一言。

その隣でオスマンがアゴに蓄えられた白い鬚をさすつている。

その表情から察するに、まだ納得をしきれていないようだ。

「ふむ、荒唐無稽な話だと一蹴したいところじやが……。
ソウマ殿に秘められてある魔力は常識を逸しておる。一概にほ
うり話とは言えんのう」

「別に信じる必要は無い、知識として持つていればいい。
信じたからと云つて、何かを得られるわけでもないしな」

「そういってみるとありがたい」

全ては信じる事から始まるとは言つが、突飛過ぎる話とはすがに
信じられる。

しかし、話を聞くにソウマ殿は敵対するつもりは無をそうじや。
下手に藪をつづいて蛇…、いや魔王が出てきてもたまらん。 穏
便に済ませられればありがたいの。

「さて、時間も惜しい。

『破壊の杖』を手に入れた経緯を教えて貰おうか、オスマン殿?」

「うむ、かれこれ三十年も前の話での、私は森の中でワイバーンに
襲われたんじや。」

その時に救つてくれたのが、『破壊の杖』の持ち主じや。
しかし、持ち主はワイバーンに受けた傷が元で死んでしまったが
「の」

大きく息を吐いて椅子に座りなおすオスマン。

その表情は少し暗い。 責任を感じているのだろう。

「その持ち主の遺品等はあるか?」

「つむ、小さなかばんに入れて宝物庫に入れてある。

『破壊の杖』と似たような物もある」とじゅし、宝物庫への入りを許可しよう。」

「もう一つ、図書館の奥にある書庫の入り、閲覧の許可を貰えな
いか?」

「理由を聞かせて貰えるかの?」

オスマンは警戒してくる様子は無い、単に興味本位で質問しているのだ。

特に隠す必要もない、話すか。

「一つは『遠見の鏡』の資料を探す事。
それともう一つ、元の世界へ帰る為の資料を探すためだ」

「ふむ、良いじゅ。しかし、遠見の鏡ならワシが既に持つてお
る。

「ひらの貸出しも合わせて許可しよう。必要になつたらこいつで
も尋ねねてきなれ。」

「礼を言つ

「何、礼を言つのはこちのまじゅや。

『破壊の杖』の持ち主が死ぬ間際に呟いてた言葉があ
るんじゅ。

「戦場へ戻らねば。ソウマ、待つていれ」とな……、何か心当た
りはあるかの?」

「さて…、同じ名前の人間なら他にもいるだろ。」

それに遺品を確認してみない事には、なんとも言えないな」

それだけ言い残し、ソウマは『テレポ』でタバサの元へと移動した。

残つたのはオスマンとサイト、一人はソウマがいた場所をジッと見つめていた。

「のう、サイト殿。君はソウマ殿をどう御つ?」

「触らぬ神に祟りなし……、かな?」

「ほつほつほ、まさにその通りじやで」

二人は安堵の息を吐き、笑い続けた。

十一話 帰還（後書き）

毎度読んでいただきありがとうございました。
今回から簡単な解説を入れていきたいと思います。

【魔法解説】

テレポ：短い距離を一瞬で移動する転移魔法。

空

タバサ達はシルフィードの背に乗り、ガリアの城へと向かっていた。

そんな中、タバサは『ハルケギニアの多種多様な吸血鬼について』と書かれた本を読んでいた。

本のタイトルから、興味を持ったソウマが尋ねる。

「この世界にも吸血鬼はいるのか？」

「いる。太陽の光には弱いけど、普段は人と見分けがつかない。それに、先住魔法を使つたり、血を吸つた相手一人を屍人鬼ゲールとしで自由に使役できる。

だから一度村に入り込まれると発見するのが困難」

「太陽の光以外に弱点はないのか？」

「弱点は他にあるかも知れない。
けど、この本には載つてないからわからない」

吸血鬼の弱点は太陽の光。それはどの世界でも共通の弱点だ。であれば……、他の世界と同様に聖水や十字架の効果があるかもしれない。

会つ事があれば、試してみるか。

「で、今回の相手がその吸血鬼なのか？」

「そう、出発の準備中にまた手紙が来た。

今回の相手は吸血鬼、それだけ書かれてた」

そう言つとタバサは本に目を戻す。

ソウマもシルフィードの背に寝転がり目を瞑る。

「着いたら起してくれ」

ソウマは言い終わるなり、すぐに寝息を立て始めた。

その頃、ガリアの城の一室で、タバサの来訪を待ち望む一人の少女がいた。

名をイザベラ。現ガリア王ジョセフの娘である。

「あのガーネイルはまだ来ないのかい？」

傍に控えている侍女が首を振る。

「まだお見えになつておりません」

「そうかい。ククク、それにしても楽しみだねえ。
きっと、震えながらやつて来るに違いないわ」

そつけなく答えたかと思つと、途端に笑い出すイザベラ。

その姿を見て、苦笑いを浮かべる侍女たち。

「シャルロットさまがお見えになりました」

同時に部屋の扉が開き、シャルロットと大きな剣を背負った男が一緒に入ってくる。

タバサの姿は予想と違い怯えた様子は無かった。
しかし、それよりも田を引かれたのは、タバサの横にいる男の方だった。

「アンタ誰だい？」

惹き込まれそうな黒い瞳、同様の髪色、そして大人びた顔立ちを見せるソウマ。

百八十サンント程あるソウマの身長と背負つた剣の大きさに比べ、いささか細身の印象を受ける。

マントこそ羽織つていながら、その姿は貴族とも見える。 。
イザベラはタバサそつちのけでソウマに尋ねていた。

「私の名は月影 双馬。 職業は傭兵でしたが、今はシャルロットの使い魔をやつております。

以後、お見知りおきをイザベラ王女

膝をついて頭を下げるソウマ。

淀みのない立ち振る舞いに、イザベラは思わず見惚れる。
その周りにいた侍女達もソウマに心を奪われていた。

「ふ、ふん、平民のようだけど。
礼儀はわきまえてるみたいだね」

イザベラは言葉とは裏腹に頬をほんのりと染める。

本当なら人間の使い魔を召喚したタバサを貶すつもりでいた。しかし、そんな事も忘れて視線はソウマに釘付け状態だった。

「任務」

「え？ あ、ああ」

ソウマに見惚れていたイザベラは、慌てて田地などが記されている書簡を手に取る。

タバサに手渡す際、何かを誤魔化すかのように尋ねる。

「そ、そうだ！ アンタ、今回の相手が吸血鬼だつてわかってるのかい？」

「知ってる」

「そ、そうかい……」

頭の中は既にソウマの事で一杯になり、イザベラはその言葉を発するだけで精一杯だった。

惚けているイザベラ達をそのままに、タバサ達は一礼して退出する。

それをボーッとしながら見送るイザベラ達、正氣を取り戻したの時は既に夜であった。

シルフィードの背に乗り、目的地へと一人は向かう。
行き先はサビエラ村、人口が三百人程度の山間にある村、

タバサはそこに行くよつシルフイードに指示を出す。
そして……、

「イザベラと侍女達に何したの？」

「扉を開いた時点で、ハーティを説くチャームを使った。

簡単に言えば、異性を一時的に惚れた状態にしたのや。」

「私に使った事は？」

「ない」

首を横に振つて否定するソウマに対し、タバサは安堵の息を漏らす。

同時にソウマの力に、その強さだけでなく多様性に不安を覚える。だが、母を救つてくれたソウマを今更疑うよつな真似はしない。そんな事を考えていると、

「吸血鬼の対策についてなんだが、聖水を使おうと思つ」

「……聖水？」

「ああ、元の世界じゃ吸血鬼に効果があつた道具だ。
この世界で通用するか知らないが、試してみる価値はあるだらう？」

「そんな物が「す」いのね！ 兄様の世界には「す」いものがあるのね！ きゅいきゅい！」

タバサの言葉を遮り、突然会話に入つてくるシルフイード。

本人曰く、最近会話が少なかつたため、喋りたいとの事だった。

「シルフィードは吸血鬼を知っているのか？
詳しく知っているなら、是非とも教えて欲しい」

「城に行く前に話してた事位しか知らないのね。
でも、兄様がいればきっと大丈夫なのね～！ きゅい！」

二人は何の情報もない事にしばし沈黙する。
が、直ぐに気を取り直して吸血鬼の対策を練る。

「それでは、ソウマが私で私がソウマで……」

「ああ、俺がタバサでタバサが俺で……」

「何言つてゐのかわからぬのね！
シルフィイにもわかりやすく言つのね！」

「「つまり、お互い入れ替わるつて事」

「最初からそうちうつのね！ きゅい！」

二人は怒つてゐるシルフィードをなだめ、準備に取り掛かる。
ソウマはタバサのマントを羽織り、杖を借りる。 そして準備
を終えると村が見えた。
ソウマ達は少し離れた場所に降り立つ。

「舞踏会に間に合わせるためにも、手短にすませる」

「慎重にお願い、ソウマが屍人鬼になつたら手がつけられない」

「そうだな、気をつけないとしよう」

村の入口に着くと、一人の男が現れる。男は村長の使いだと言い、ソウマ達を村長の家まで案内してくれた。

扉を開けて中に入ると、村長と思われる白髪の老人が立っていた。

「よくぞいらっしゃいました。 騎士様」

深々と頭を下げる老人。

「村長、頭を上げてよい。 私はガリア花壇騎士、グラード・シエペシコ。

吸血鬼事件の詳細を教えていただけるか?」

「は、はい。 ですが、グラード・シエペシコとは……?」

「詮索は不要。 お前は聞かれたことだけに答えばよい」

「こ、これは失礼致しました」

ソウマに先を促がされ、村長は説明を始める。

発端は二ヶ月前に十二歳の少女が犠牲になつたこと。

それを皮切りに今現在で九人の犠牲者を出していること。

「犠牲者の中には派遣された騎士様もいらっしゃいます。

村に着いてから、僅か三日で吸血鬼にやられてしまいましたですから、その……」

「大体理解した、だが心配は無用。

村長、今から指示する事を一時間以内に実行しろ」

指示を出してから一時間後。

村の中央広場には三人の男女が集められた。

彼等は村に引っ越してきてから一年未満の人々だった。

「これで全部か？」

「い、いえ、後二人。占い師の女性とその息子のアレキサンドルがおります。

ですが、アレキサンドルの母親のほうが病気でして、外に出れないといいうのです」

「そうか、ならアレキサンドルだけ連れて来い。

母親のほうは俺が後で調べる」

「はい。すぐに連れてきます」

しばらくして連れてこられたアレキサンドルは不機嫌そうな表情を浮かべていた。

母親を連れ出さない事を条件に、渋々ついて来たのだろう。

ソウマは四人の前に立ち、命令する。

「これから簡単な検査を行う。四人とも手を出してもらおう」

その言葉に四人が恐る恐る両手を前に出す。

一人ずつ、瓶入った聖水を手のひらに垂らしていく。

そんな中、広場に集まつた村人達はその光景を頑なに見つめていた。

「騎士様、これは……？」

「気にするな、ただの水だ」

そんな会話をして、最後にアレキサンドルに聖水を垂らした時だつた。

「熱ツ！ な、なんだあ、こりやあ？」

突然、手のひらに熱を感じ慌てるアレキサンドル。ソウマは聖水を袋に仕舞うなり、別れを告げる。

「さよならアレキサンドル」

「ちよ……」

言い終わる前に、ソウマの剣が振り抜かれていた……。アレキサンドルが頭から真つ二つになり、大量の血を噴出しながら倒れる。

その光景を見ていた二人が途端に悲鳴を上げる。

「ひ、ひい！ わ、私は吸血鬼じゃありません！」

「わ、私もです！ 吸血鬼ではありません！」

「安心しろ、先の聖水は吸血鬼のみに反応する。反応しなかつたお前達は人間だ、よかつたな？」

一人は失神していたため、村人に運ばれていった。

ソウマは剣を背負いなおし、袋から油袋を取り出し遺体にかける。油袋をタバサに持たせ、左手で地下水を掴み、右手にあるタバサの杖を振る。

『ウル・カーノ』

『ゴオウー』と激しい音と共に炎が立ち昇る。

油のかかった遺体は勢いよく燃え、五分足らずで灰となつた。

「村長、アレキサンドルの家を確認して来い。

アレキサンドルの母親が死んでいれば、家』と燃やせ」

「わ、わかりました。 それで騎士様は?」

「少し休ませてもらう。 村長、部屋を借りる」

ソウマ達はさつとその場を後にする。

村長の家にたどり着き、扉を開ける。 その先に一人の少女が立つていた。

少女から臭いが漂つている。 それは、よく知つている臭いだ……。

「私はエルザ。 お兄ちゃん達、誰?」

「ヴラード・ツュペシュ、君を殺しに来た騎士さ」

「えつ?」

驚きの表情を浮かべるエルザにソウマは杖を向ける。

エルザは後ずさりながら弁解の言葉を口にするが……、

「わ、私は吸血鬼じゃない！」

「誤魔化しは無駄だ。お前の口から血の臭いしかしない」

「くつ！ 人間の癖に！」

エルザは一瞬屈むと即座に床を蹴り、ソウマに向かって猫のよう
に飛ぶ。

瞬く間に距離が近づく、並みの人間であれば噛み付かれていたで
あろう。

しかし、エルザにとつて相手が悪すぎた。

「な、何！？」

ソウマの首筋に噛み付く直前で止まってしまう。

首根っこを誰かに捕まれている。見ればそれはソウマの手だつ
た。

エルザは暴れ、何とか手を振りほどこうとするがびくともしない。

「は、離して！ 何？ 何がいけないの？」

人間は生きるために牛や豚を殺してる！

なら、吸血鬼が生きるために人間を殺して何が悪いの！？」

「勘違いするな？ 人間を殺す事が悪いんじゃない。

悪いのは人間じゃないお前が、人間より弱かつた事だ」

《ゴギヤー》という鈍い音と共に骨が折れる音がする。
ソウマの手に捕まっていたエルザの首が握りつぶされていた。
力なく垂れ下がるエルザの手足。

「後は処分して終わりだ。

タバサ、シルフィードの場所に向かうぞ」

「うん。 けど、それ何かに隠したほうがいい

「そうだな、『バニシユ』……、これでいいか?」

「……すごい、でもそれなら大丈夫」

ソウマが魔法を唱えると、死体は見えなくなってしまった。
見えなくなる瞬間を見ていたタバサは、信じられないといった表情をしていた。

シルフィードの場所に着く頃には魔法が解けていた。 同時にシルフィードも降りてくる。

「早かつたのね。 きゅい！

あれ? 兄様、それなんなのね?」

「吸血鬼の死体だ。 食べるか?」

「た、食べないのね!

なんで死体を持つてるのね!」

「処分するためだ」

慌てるシルフィードを余所に、ソウマは死体を放り投げる。
タバサから油袋を受け取り、死体に振り掛ける。

『ウル・カーノ』

アレキサンドルの時と同じように炎が舞い上がる。
エルザの死体も五分ほどで灰になった。ソウマはその上からさ
らに聖水を振りまく。

その光景をタバサとシルフィードは不思議そうに見ていた。

「何してんの（ね）？」

「とある世界の話だが、死んで灰になつた吸血鬼は蝙蝠になつて復
活するらしい。」

だから、念のためにな

「そんな話、聞いたことないのね。

兄様の話は不思議なモノばかりなのね。 もやい

「ハルケギニアの世界の話ではない、知らなくて当たり前だ」

いつか読んだ本を思い出しながら、聖水を袋に仕舞う。
タバサとシルフィードは顔を合わせながら首をかしげていた。
そんな二人に声をかける。

「さて、学院へ帰るとしよう」

「報告が先」

「報告は監視者に任せればいい。後は書面で伝えておけ

「…わかつた」

ためらうタバサを無理やり納得させる。

折角、監視してくれているんだ、報告はそこいつに任せやしないとな。

それに今回の事で、しばりくは任務もないだろ？

そう考えながらソウマ達は村を後にした。

十一話田 悪魔（後書き）

なかなか上手くかけませんが、
読んでいただきありがとうございます。

【魔法解説】

バニシュ：FF7に登場し、効果は対象を透明する魔法。
チャーム：魔法ではなく、『ハートを盗む』というアビリティ。

効果は対象を誘惑して味方に引き込む。

十三 詩画 疾風（前書き）

あまり上手く書けていませんが、『アホ承ぐださい』。

アルヴィーズの食堂の上の階は、大きなホールになっている。

『ブリッジの舞踏会』はそこで行われていた。

そして、ホールに繋がるバルコニーにソウマとサイトはいた。

「ソウマ、今日は何処行つてたんだ？」

「ちょっとそこまで、ドラキュラ退治にな」

「へー、ドラキュラ退治にねえ……つてドラキュラがいるのか！？
しかもちょっとそこまで行けば会えるのか！？
でも、あれつて架空の生物じゃなかつたつけ？」

「サイト……、今お前のいる世界は何処だかわかつているか？」

呆れて聞き返すと、サイトは納得の顔をする。

「相棒、ドラキュラつてなんでえ？」

「デルフは知らないのか？」

「ドラキュラつてのは人間の血を吸つて生きる奴だよ」

「吸血鬼の事だ。 サイトの世界では吸血鬼をドラキュラと呼ぶ。

ただドラキュラはある人物を元に構成された架空の存在だがな」

代わりに説明すると、トルフリンクガーは「おでねーた」と繰り返す。

サイトも驚いたような声を出していた。

どうやら、詳しく述べは知らなかつたようだ。

「折角の宴だつていつの間に、あんた達は何話してゐるよ。まつたく、少しほ楽しむとかしなさいよね？」

「楽しんでるが、井に食べるまつでだけどなー。」

「ああ。だが、料理だけでなく、酒も美味しい

美味そつに肉をほおばるサイト。

その横でソウマはグラスに注がれたワインを呑んでいた。

「それはわからぬいでもなー。けど、ソウマは私と踊るべや」

「きやつーー。」

びつくりして声を上げるルイズの背後から、タバサが現れる。ソウマの近くまで歩み寄ると、タバサはそつと手を差し出す。緊張しているのか、タバサの手が少し震えてくる。

ソウマはその震える手を取り、手の甲にキスをする。

「私と一曲踊つて頂けますか？ レディー？」

「…喜んで」

少し間を置いてタバサは言葉と共に笑顔を浮かべる。

タバサの手を握ったまま、ホールへと向かった。

「上手。踊りの経験があるの？」

「一応な、似たようなパーティーに呼ばれは無理やり踊らされたいた。

そんな事を繰り返して、気付けばある程度踊れるようになつてた

タバサの軽やかなステップにソウマもあわせる。

ふとバルコニーに目を向けると、サイト達がホールへと来ていた。なにやらサイトが渋っている様子だったが、しばらくすると一人は踊りだしていた。

そして夜も更け、踊り終えたタバサ達は部屋に戻つていった。

翌朝、ソウマは学院長室へと来ていた。

「これが遠見の鏡じゃ」

田の前に置かれたのは直径約三三十センチ程で楕円形の鏡だった。装飾もなく、立たせる為の棒が鏡の後ろについているだけであつた。

「これで異世界と交信は出来るのか？」

「どうかのう、そもそも『遠見の鏡』は製作者が不明なんぢや。

『遠見の鏡』と言つて、せのひに、念じれば遠くを見通せたから勝手にワシが名付けたんじや』

オスマンは眉をひそめながら鏡に手をやる。

「資料があると聞いたが？」

「カツカツカ、ワシが適当に書いた説明書ならあるぞ。百年程前に鏡を見つけ、説明書を書いたんじや」

「理解した。鏡をじばりく借りる。

それと書庫への立入り、閲覧の許可も頂こいつ」

「うむ、くれぐれも迷惑はかけんてくれ

鏡を道具袋に入れ、オスマンに一礼して退室する。部屋に戻つて扉を開けると、未だベッドで寝ているタバサがいた。ソウマは首を立てないよつて鏡を机にそつと置く。鏡に魔力を送り込みながら、ラムザのいる場所が映るよつじる。しばらぐすると『ミシミシ』と嫌な音を立てながら鏡はラムザを映し出す。

「ラムザ、聞こえるか？」

「ソ、ソウマ！？ ソウマなのか！？ 今何処にいるんだ！？ それに無事なんだね！？」

鏡に映るラムザから矢継早に質問される。

「落ち着けラムザ、余り時間がない。」

手短に説明する。

「あの後、俺は地下に潜つた。だが、強制的にハルケギニアといふ異世界に召喚されてな。」

今は使い魔という立場で生活して、元の世界へ戻る方法を探しているが見つかっていない」

「ハルケギニア……聞いたこと無いな。 だけど、ソウマが無事で安心したよ。」

それに戻る方法も今は無いだけで、ソウマなら見つけるだろ？
僕達は君の帰りを待つてゐる。 と言つても異端者だから人里離れた場所でだけね」

「仲間達にでも伝えておいてくれ。 つと、そろそろ鏡が限界のようだ。」

これで連絡は終わりになるが、戻る方法については期待せず待つてくれ」

「また会おう」

先ほどから《ミシミシ》と鈍い音を立てていた鏡に亀裂が入る。送り込んでいた魔力を止めるに、鏡は枠だけを残して粉々に砕け散つてしまつた。

「今のは誰？」

背後からタバサの声が聞こえ、振り返ると寝巻き姿のタバサが目に入る。

起してしまつたかと思いつつも、タバサの問いに答える。

「前の世界の戦友、英雄と呼ばれてもおかしくない男さ。」

しかし、実直が故に異端者としての烙印を押されてしまったがな

「異端者？ 強いの？」

「異端者の説明は必要あるまい。 いひうの世界では関係ないからな。

強さは…… そうだな、今のサイト百人が束になつてもかなわない程度だ」

タバサは呆れた顔をしているが、この世界に住む住人との力の差がわかつたのイヴァーリースだらう。

もし、元の世界と自由に行き来が出来るよつになれば……

「そろそろ朝食の時間、着替える」

「ああ、俺はオスマン殿のところへ謝りに行つて来る。 すまないが、先に行つてくれ」

「わかつた。 間に合わなかつたら、直接教室に来て

「ああ、わかつた」

鏡の枠だけを持つて学院長室へとやつてくる。 何度も扉をノックするが反応が無い。

仕方なく扉を開けると、杖を持つて放心しているオスマンがいた。 オスマンは呼びかける声に反応しない。 どうしたものやらと考えていると

「ソウマ殿！ お主はなんてことをしてくれたんじや！？」

ワシは貸す事は許可したが、壊していくとは言つておらんぞ！

恩を仇で返すとは一体どうじてくれるんだじゃー!?

「すまない、まさか壊れるとは思っていなかつた。

詫びと言つてはなんだが、一度だけオスマン殿の言つ事を聞け

い

顔を真っ赤にして捲し立てるオスマンに謝罪する。合わせて一度だけ従う事を伝えると、一瞬したり顔になるオスマンだった。

「ふむ？ な、な、その謝罪受け入れよ。じゃが、宝物庫および書庫では絶対に迷惑をかける出ないで？ 宝物庫が爆発したり、書庫が燃え上がった日には、ワシはお主を殺さねばならぬ」

失言だったとわかるも、今更撤回するつもりもない。

素直に言つ事を聞き、部屋から退室してタバサの待つ教室へと向かう。

教室

朝食を取り終えて教室へ着たが、ソウマは未だに来ない。仕方なく本を読んでいると、

「おはよ、タバサ。ソウマはどうじたのかしら?」

挨拶をしながら、隣の椅子に座るのはキュルケだった。私は読んでいた本を閉じて、今朝の出来事を説明する。

「へー、異世界へ交信できる鏡ねえ。

私は聞いたこと無いけど、かなり希少な物なんじゃないの？」

「情報が無さ過ぎて詳しい事はわからないけど、たぶん世界に一つしかないと思う。

私も、何でも見通す鏡があるかも知れない位でしか聞いたこと無かつた」

「それってかなり不味いんじゃないのかしら？」

ソウマに弁償できるとは思えないし、どうするのかしら？」

「わからない、けどソウマなら大丈夫だと信じてる」

キュルケがむず痒い表情を浮かべているが、私は気にせず本を開き田を落とす。

しばらくすると《ガラツ》と言ひ音と共に扉が開き、ギターが現れた。

それと同時にソウマがキュルケとは反対側の席に現れる。

「遅い」

「すまない。鏡を壊したのは不味かつたな。

詫びとしてオスマンに一度だけ従う事になった。遺憾ながらな

いつも通りの声で話すソウマだが、少し怒っている感じた。隣に座るキュルケは「一度だけ従う」と言ひ言葉に反応して、少しトリップしてくるようだつた。

「授業を始める。皆が知つての通り、私の二つ名は『疾風』だ。疾風ギターの名の通り、私は風の使い手である」

自己紹介を始めるギター。自分と同じ風の使い手だが、彼の事は嫌いだ。

実戦に出た事も無い人間が、如何に自分が強いかを論じているからである。

「ミス・ツェルブストー、君は最強の系統は知つているかね?」

「そうね、以前なら『火』と答えていたでしょうけど今は違いますわ」

「そりかね、では何であるか言つて見たまえ」

ギターは確信していた、最強の系統は『風』である。
しかし、キュルケの口から出てきた言葉は、見当違いなものであった。

「ソウマが使う水ですわ、ミスター・ギター」

「水だと……? そんなものが風に勝るとでも言つのかね、ミス・ツェルブストー」

「その通りですわ、ミスター・ギター」

キュルケは笑みを浮かべ、ギターに言い放つ。
顔を真っ赤にするギターは、誰が見ても怒りに震えているのがわかつた。

自分の隣に座るソウマは黙っている……、いや笑っている？

「よろしく、では使い魔。私のその『水』の魔法を使つといい」

「あら、死んでも責任は取れませんわよ?」

「私は良いと言つてこる」

ギターは腰に差した杖を引き抜く。

ソウマはおもむりに立ち上ると、ギターに一言叫びる。

「最強の魔法じゃないが、まあいいだろ?」

「今から負けたときの言い訳かね? 御託はいいからかかつてきましたまえ」

ソウマはギターの刃を使つたときのよつて両手を前に突き出す。詠唱するソウマの周りだけでなく、教室全体の温度が下がつているように感じる。

『虚空の風よ、非情の手をもつて人の業を裁かん。 ブリザフ』

詠唱が終わり、ギターの吐く息が白く見えた瞬間だつた。ギターは反撃する暇も無く一瞬で氷像になつていた。

「醜い氷像の出来上がりだな」

ソウマが言い終わると、周りの生徒達が歓声を上げる。

そんな喧しい声が響く教室の扉が突然開き、コルベールが現れた。

「あいや、ミスター・ギター。失礼しますぞ」

教室に入ってきたコルベールは教壇にギターではなく、氷像が置かれていた事に驚く。

その拍子に頭に乗せていたカツラがずれ、床に落ちた。
コルベールは落ちたカツラを急いで拾つて頭に乗せなおすなり、咳払いをする

「じほん、今日の授業は全て中止です。

急ですが本日、アンリエッタ姫がこの魔法学院に行幸なされます。
そのため、今から歓迎式典の準備を行いますので、生徒諸君も準備をしてください」

それだけ言つと、コルベールはささと教室を出て行つてしまつた。

生徒達は教壇で未だ凍つたままになっているギターを見て思つた。
同じ教師であるギターを助けないのだろうかと。

生徒達が各自部屋に戻り、準備をし始めた頃だつた。

コルベールは慌てて教室へ戻り、ギターを氷を溶かして助けたと
か……。

十二話 四風（後書き）

【魔法解説】

ブリザラ・氷属性の中程度の魔法。
氷柱にして攻撃したり、相手を凍らせたりとバリエーション豊富です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2428m/>

旅人・双馬

2010年11月11日08時25分発行